

近代日本版画家名覧 (1900—1945)

〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、頻出する参考文献については以下のように表記する。
 - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
 - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者
岩切信一郎（新渡戸文化短期大学教授） 植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員）
加治幸子（元東京都美術館図書室司書） 河野 実（鹿沼市立川上澄生美術館館長）
滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員） 三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長）
樋口良一（版画堂）
- 8、『版画家名覧』は、版画堂のホームページ <http://www.hanga-do.com/> でもご覧いただけます。

戦前に版画を制作した作家たち (5)

甲斐成樹 (かい・せいき)

大分県大野郡で生野正義ら教員仲間が発行した版画誌『大野版画』第1号(1933.12)に《ばら》、第2号(1934.2)に《犬〔賀状〕》、第3号(1934.5)に《グラジオラス》、第4号(1934.7)に《桐の花》を発表。武藤完一は第1号《ばら》について「技巧がうまいのだから、もっと画心を修養したらうまくなる」と評している。当時、大野郡戸上小学に勤務。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002)／『創作版画誌の系譜』(加治)

海保 猛 (かいほ・たけし)

茨城県稲敷郡に生まれる。長野県師範学校一部1年に在学中、同校生徒が発行した版画誌『樹水』第3号[1941]に《校舎》を発表。1945年同校を卒業。【文献】『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950)(加治)

海鋒秀雄 (かいほう・ひでお)

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)5年在学中、生徒が発行した版画集『刀再版』(1940～1941)に参加。その第1号[1940]に《門》、第2号(1940.10)に《町》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

柿崎卓治 (かきざき・たくじ) 1913～1947

1913(大正2)年青森市油川に生まれる。1932年に青森中学校を卒業。家庭の事情により東京の美術学校への進学を断念し、県庁に就職するが、肺結核を患い退職。入院療養及び自宅での静養後、一家で東津軽郡平館村に移住する。中学校在学中に佐藤米次郎と根市良三の三人で青森での最初の版画誌『緑樹夢』を創刊(創刊号は所在不明)。その第2号(1930.9)に《真夏》《教会》と表紙絵、第3号(1931)には《春の油川風景》《港の朝》を発表。『緑樹夢』に刺激された青森の若い洋画家たちは、佐藤米次郎の兄佐藤米太郎を中心に青森創作版画研究会・夢人社を設立。『緑樹夢』を吸収・合併し、版画誌『彫刻刀』(1931～1932)を創刊する。柿崎はその第1号(1931.6)に《チューリップ》を発表し、第9号(1932.4)まで発表する。中学校卒業を機に根市良三らとデザイン性の高い版画誌『純』を創刊(1932.9)し、《黒林》《花》を発表するが、『純』は1号で終る。18才当時、東奥美術展第1回(1931.3)の中学校版画においては《油川風景》他が、そして第2回展(1933)の一般版画では《りんご(1)》が入選する。1937年8月青森師範図画教室において行われた「夏期図画講習会」(講師：今純三)に参加。肺結核発病後は版画制作ができなくなり、体調をみては小学校の代用教員として図画を教えていたようである。1947(昭和22)年逝去。【文献】江渡益太郎『青森県版画教育覚え書』(津軽書房 1979)／『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録(青森県立郷土館 2001)／『東奥美術展の画家たち』展図録(青森県立郷土館 2005)／『創作版画誌の系譜』(加治)

柿原俊男 (かきはら・としお) 1897～没年不詳

1897(明治30)年仙台に生まれる。葵橋洋画研究所などに学ぶ。木版画は平塚運一に学んだものと思われ、1927年に平塚を中心に創刊された同人版画集『版』(1927.12～1929.7 8冊か)の第1号に《童心礼賛》を発表。以後、現在確認されている最後の号、1929年の第8号まで作品を発表している。その間、1928年に日本創作版画協会第8回展に《水仙と他の花》《風景》が初入選。翌年の第9回展にも《ルーフガーデンから見る》《臥裸婦》が入選した。1930年には中島重太郎の創作版画倶楽部が主宰する『きつつき』第2号(1930.9)に《数寄屋橋に立ちて》を発表。また、中島が組織し、平塚運一らが審査員を務めた1931年の新興版画会第1回展に《女の顔習作》が入選している。続いてこの年に結成された日本版画協会第1回展に《自像》が初入選。1932年に会員に推挙され、同年の第2回展から1942年の第11回展まで連続して出品している。当時の住所は渋谷区代々木富ヶ谷町。また、1942年には平塚運一の主宰する『きつつき版画集』昭和17年版(1942.8)に《みち》を、翌年の昭和18年版(発行日不明)に《武蔵野の富士》を発表。戦後は1947年の第15回日本版画協会展に《終戦直後の感》を出品するも、その後の出品はなく、1953年退会。退会時は神奈川県津久井郡小原町に住む。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『版画 CLUB』3-2／『創作版画の系譜』(三木)

柿本民子 (かきもと・たみこ)

朝井清の主宰する呉版画倶楽部第2回展(1939.6)に出品。作品は未見。【文献】『版画消息』『日本版画協会会報』31(1939.9)(樋口)

佳恵 (かけい) →高橋松亭(弘明)(たかはし・しょうてい)

「佳恵」と署名の木版作品には《木枯らし》《夜の品川》《奥州二本松》のほか《穴守以な利》《安津末の森》《洗馬の月》などの作品があり、これらの中には、関東大震災後に渡辺版画店から出版された高橋松亭(弘明)の作品と同一絵柄の作品がある。清水久男氏(大田区立郷土博物館学芸員)によれば、佳恵と高橋松亭(弘明)とは「同一の画家」であり、「松亭ギャラリーのマーク・カーン(Marc Kahn)氏も同一画家と結論付けている」という清水氏の指摘がある。【文献】『浮世絵と現代版画』31(蒐堂 1993秋)／『山田書店新収目録』29(1997.7)／『特別展「高橋松亭(弘明)の世界」図録』(大田区立郷土博物館 2005)(樋口)

景川弘道 (かげかわ・ひろみち) 1914～2008

1914(大正3)年7月4日鳥取市に生まれる。5歳の時に家族で北海道に移住。1940年に香川軍男、鷺見憲治ら結成する美術グループ「凍影社」に参加、油彩、水彩画を描く。版画は1945年から始め、北海道版画協会の創立(1959年)に参加。日本アンデパンダン展(日本美術会)、日本板画院やパリ、モスクワ、チュウリッヒなど各種国際版画展に出品。凹版による板目木版を制作。連作『ヨーロッパ百景』(1976頃)、連作『北海道百景』(1978頃)や版画集『子どもの世界』(共同出版 1982)、『版画・北の旅』(共同文化社 1985)などの刊行がある。2008(平成20)年北見市で逝去。【文献】『原色 浮世絵大百科事典 第10巻』(大修館書店 1981)(樋口)

華月 (かげつ)

大正後期から昭和初期にかけて、高橋松亭(弘明)と同図柄の木版画《日光東照宮》(縮緬摺)の作品を残す。【文献】『よみがえる浮世絵—うるわしき大正新版画展』図録(江戸東京博物館 2009) (樋口)

掛野 茂 (かけの・しげる)

1931年8月3日～7日に講師平塚運一で開催された大分師範学校での版画教育講習会に参加し、版画制作を始める(『郷土図画』1-5 1931.10)。主宰した武藤完一は、この講習会を機に版画誌『彫りと摺り』(1931～1933)を創刊。その創刊号(1931.9)に掛野は講習会で制作した《椿》を発表する。一方、講習会に中津市から参加した掛野を含めた同宿の者10人が親睦と技術の向上のために、地元で版画誌『空き巣』(1931～1932)を発行。その第1号(1931)に《小野市風景》を発表する。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002)／『創作版画誌の系譜』(加治)

景山濱市 (かげやま・はまいち) → 景山宗竹 (かげやま・むねたけ)

景山宗竹 (かげやま・むねたけ)

大分の武藤完一が発行した版画誌『木版』(1928～1930)は全国教員仲間の版画同人誌であり、その第2号(1929.12)に《於中島》と表紙絵を発表。当時、景山は大分県師範学校教員として勤務しており、同校教員の武藤の版画同人誌に参加したものと考えられる。東京では創作版画倶楽部の中島重太郎が情報誌『版画 CLUB』(1929～1932)を発行し、版画を一般から公募した。景山は『木版』に発表した作品《於中島》を景山濱市の名で応募し、同誌第2年2号(1930.2)の紙上展第6回に入選。選者逸見享は「景山氏の雲も少し難でした。割木を積んだやうな島に見えるのも、ただ三角刀のせいばかりではないと思ひます。(以下略)」と評している。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002)／『創作版画誌の系譜』(加治)

華香 (かこう) → 森田華香 (もりた・かこう)

戦前(大正期前後頃に)、間判や細判の《漁火》《文鳥》《蟬》《蝶》《蓮の花》など外国向けと思われる夜景や花鳥の木版画を制作。落款から、(森田)華香(1870～1931)か。明治・大正期の風俗雑誌『風俗画報』(東陽堂 1889.2～1916.3)の挿絵も描く。【文献】ホームページ『JAODB (The Japanese Art Open Database)』(樋口)

鹿児島彦次郎 (かごしま・ひこじろう)

1931年8月3日～7日、大分県師範学校で行われた東京創作版画倶楽部(中島重太郎)主催、大分市教育会後援の創作版画講習会(講師は平塚運一)に参加。また、1936年8月、大分県師範学校会場の西田武雄エッチング講習会にも参加。当時、大分県大分中学校の教員と思われる。【文献】『郷土図画』1-5(1931.10)／『エッチング』47(樋口)

葛西小友 (かさい・しょうゆう)

1933年青森県黒石町において安藝蜻一らと版画誌『はなが』を創刊(所在不明)。その第2号(1933.2)に《マントの子供》《セーターの子供》と版種不明の《読書》を、第3号(1933.3)に《雪の駅》《冬》を発表。【文献】『は

なが』2・3 (加治)

笠井秀喜 (かさい・ひでき)

西田武雄の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第13号(1933.11)にエッチング作品を発表。当時、訓導として勤務していた東京芝区桜田小学校において、1933年11月28日、同校主任訓導の高橋喜三郎と共に尋常6年男子60名に課外教育としてエッチング実習を実施。これは日本での最初の試みであり、その意義などについて笠井は『エッチング』第14号(1933.12)に生徒の作品と共に「エッチングの教育的価値」と題し、また第15号(1934.1)には「エッチング実習後記」として小論を寄稿している。【文献】『エッチング』14・15(加治)

笠井鳳齋 (かさい・ほうさい)

生没年未詳であるが、鶯亭金升著『明治のおもかげ』(山王書房あるいは岩波文庫 1953)によると、大蘇芳年晩年の門弟で、明治中期には陸軍省勤務で製図をかいていた。『改新新聞』や東陽堂の『風俗画報』での挿絵で活躍。小林清親との交流も知られる。大正から昭和には肉筆物で売り出したが振るわず昭和の初めに筆を絶ったとし、性格は無邪気で欲のない好人物ではあったが、粗忽な面もあったことの逸話を紹介している。他の作品例としては、明治30年代頃の講談本『江戸の花血染纏』(放牛舎桃林講演・石原明倫速記 発行年未詳)の木版口絵を描いている。大正期には御大礼錦絵《紫宸殿の御儀》(250度摺)、《大嘗祭の御儀》(150度摺)の2図4円を美術木版画会(日本橋区室町)から発行(『美術週報』109 1916年5月14)。『幼年倶楽部』で挿絵を描いてもいる。あるいは絵葉書も多く、仏教関係の地獄図などを得意としたようである。(岩切)

笠木 實 (かさぎ・みのる) 1920～

1920年(大正9)群馬県桐生市に生まれる。桐生中学時代の1934年、構造社第8回展に油彩画《母の故郷にて》を出品。その一方で、小林萬吾主宰の同舟舎絵画研究所に入所して絵画を学ぶ。そこで清宮質文と親交を結んだ。また、1935年1月発行の『エッチング』誌に、研究所製エッチングプレス所有者として名前が掲載され、同年8月号には民家を描いた銅版画が、11月号には《粉ひき場》(エッチング)が掲載されていることから、その頃すでに西田武雄の日本エッチング研究所に学びながら銅版画の制作に熱中していたことがわかる。1937年東京美術学校油絵科予科入学。在学中の1940年に日本版画協会第9回展に《逆光の林》などのエッチング4点を出品。また、日本エッチング作家協会第1回展に《のぶ》を出品した(『エッチング』95に図版掲載)。1941年日本エッチング作家協会第2回展に《人物》を出品。この年戦時下の特例で通常の修業年限より3ヶ月短縮、12月に繰り上げ卒業した。美校在学中のエッチングとしては、アンデシュ・ソーンの影響が認められる《習作》(『エッチング』63)やルーベンスの油彩画を模写した《十字架》(『エッチング』76)などが確認できる。1942年第5回新文展に油彩画《工場の歌》(桐生北川工場)を出品。またこの年、国画会第17回展に版画《エチユード》(銅版画)と《顔》を、日本版画協会第11回展に《顔》《風景》などのエッチング10点を、日本エッチング作家協会第3回展に《婦人像》を出品した。さらにこの年6月に、桐生市の桐生倶楽部で個展を開催した。1943年日本版画協会会員と

なる。戦時中は召集されたが、1945年9月16日に復員。戦後は、日本版画協会展や春陽会展に出品。協会は1953年に退会したが、春陽会は1951年の第28回展で春陽会賞受賞、1952年に絵画部で準会員推挙、1955年に会員に推挙されて出品をつづけた。画文集『岩魚の谷・山女魚の溪』（白日社 1994）／画文集『カワセミの歌』（平凡社ライブラリー 1996）がある。【文献】『エッチング』／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（滝沢）

笠松一夫（かさまつ・かずお） 1906～没年不詳

1906（明治39）年3月25日福井県大野郡北郷村に生まれる。福井県立工業学校卒業。図案を専攻。東京美術学校師範科に学ぶも家事都合で退学したという。その後、小学校に奉職。郷土の洋画団体に関係する一方、木版画を独習し、1928年に詩と版画の雑誌『瓦版』（1928.5.20）を創刊。1934年には第15回帝展に《名園雪景》が入選している。日本版画協会には1938年から出品するようになり、同年の第7回展に《鶴舞園雪景》が初入選。出品時の住所は名古屋となっているが、1934年の帝展出品時の住所が福井だったので、その間に勤務校の異動があったのであろう。翌年の第8回展に《名城雨景》、1941年の第10回展《少女像》、1942年の第11回展に《高原景色》を出品。1943年は不出品だったが、会員に推挙されている。また、この年に結成された日本版画奉公会の会員になっているが、住所は「名古屋市伝馬国民学校」とある。戦後は郷里の福井に戻り、農事のかたわら郷土の文化運動に参加。1946年の第14回日本版画協会展に《霞ヶ城春景》を出品。その後も、1948年の第16回展から1950年の第18回展に出品したが、1953年に退会している。【文献】『日本版画協会会報』36・〔40〕／『エッチング』123／『日本版画協会展出品目録』／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（三木）

笠松紫浪（かさまつ・しろう） 1898～1991

渡邊庄三郎提唱の「新板画」制作に参加。淡い詩情を盛り込んだ風景版画で知られる。1898（明治31）年1月11日浅草区元鳥越町に生まれる。父笠松弥三次、母との四男。本名四郎。1912年4月、14歳で鏗木清方入門し、「紫浪」の雅号を受ける。1915年異画会初出品初入選。翌年には異画会三等賞、国民美術協会展での褒状をうける。清方門下の「郷土会」への日本画出品を継続的に行った。1919年、21歳の時に渡邊版画店からの新板画第一作《青嵐》でデビュー、《落陽》、《うろこ雲》、《初秋》、《おぼろ月》など初期佳作品を制作したが、関東大震災で版木消失。その後も継続的に制作して1941年までにその数、数十点に上る。1933年帝展で日本画《蔵を煮る》が初入選。その後の文展でも度々入選を果たす。他の渡辺金次郎、芸艸堂などの版元からも乞われて版画を多数出版。戦後の1955年からは自画自刻自摺の創作版画活動を開始し、翌年にはそのお披露目の第一回個展を丸ビルで開催。この創作版画だけでも生涯100点を超える数である。雑誌の挿絵も描き、特に講談社の絵本『浦島太郎』（1937.5）はじめ、『一寸法師』等も担当している。1991（平成3）年6月14日逝去。【文献】笠松紫浪「わが師・鏗木清方先生と木版画」『版画芸術』16（阿部出版1977）／『木版日本百景—笠松紫浪木版画展—』図録（年譜付 山梨県立美術館 1996）（岩切）

加地春彦（かじ・はるひこ） 1920～1948

1920（大正9）年4月松江に生まれる。國學院大學国文科を卒業し、文部省国民教育局、日本放送協会嘱託となる。木版画は、宇都宮中学校で川上澄生に学び、1942年の第11回日本版画協会展に《高千穂の山の町》が初入選。翌年の第12回展に《夜明けの山原》《旅人の心にも似よ》《秩父雁坂（「かぜ・やま・はな」ノ内）》《松原湖附近（「かぜ・やま・はな」ノ内）》の4点が入選。1944年会友に推挙され、同年の第13回展に《華山懷慕》《妙法岳附近》《寂眠》の3点を出品。会員に推挙されている。戦後は文部省の急速な教科書改編の任に当たる一方、徳川夢声の「千夜一夜」の放送台本なども手がけた。1946年の第14回展に《「夏・志賀・経路」より A》など10点、1947年の第15回展に《湖端》など4点を出品。また、1948年度の『こくご』読本の木版画挿絵採用に尽力したが、過労のため発病。1948（昭和23）年2月18日浦和で逝去。翌1949年の第17回展に遺作の特別陳列があり、1938年の《津軽の馬》から1947年の《山麓》までの作品、カット、蔵書票、団扇絵など約30点が並ぶ。また、加地が提言した恩地孝一郎・平塚運一・前川千帆による『こくご』読本の木版画挿絵も同会場に並んだ。【文献】『第十七回日本版画協会展出品目録』／『日本版画協会会報』37・〔40〕／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（三木）

梶 宗樹（かじ・むねき）

『支那事変 従軍之思ひ出』と題する28図入りの多色木版画帖（第十六師団司令部刊行 1939）を残す。【文献】『版画堂』目録13（1991）（樋口）

梶田半古（かじた・はんこ） 1870～1917

明治期には『文芸倶楽部』等掲載の木版口絵・挿絵の美人画で知られ、あるいは意匠家としても活動。現在では近代日本画の代表的画家の多くを輩出した一大画塾の師匠として名高い。1870（明治3）年6月25日東京下谷に生まれる。父は彫金師・梶田政晴で、長男（錠次郎）。小学校卒業後の1883年に浮世絵師鍋田玉英入門し、玉洲の号を受ける。翌年6月頃まで通うが眼病を患い中断。1885年に眼病癒えて改めて石井鼎湖に南画を学ぶ。この年に父を亡くし、輸出用工艺品（詩絵・彫金）の図案や絵付けで生計をたて、画業では4月の東洋絵画共進会で褒章を受ける。この頃から「半古」の号に改めた。1891年の日本青年絵画協会臨時研究会で三等褒状。1892年の第1回絵画共進会では審査員に推選され。1893年第2回絵画共進会で一等褒状及びシカゴ・コロンプス世界博覧会にも出品。24歳の1894年に、審査員も務めた日本青年絵画協会第三回絵画共進会への出品《源氏夕顔巻》で一等褒状を受賞し確固たる地歩を固めた。1896年からは新聞との関係を強め、同年6月の三陸海嘯では被害地に都新聞特派記者となり、1897年には東京毎日新聞、同年中に読売新聞社員となる。1898年に日本美術院創立に特別賛助会員となり日本絵画協会・日本美術院連合共進会に毎年作品を出品。7月北田薄氷（尊子）と再婚し、10月から富山県立高岡工芸学校教頭として翌年6月まで赴任。1901年、前年死去した妻薄氷（紅葉門下）のために12月に『薄氷遺稿』（春陽堂）を出版。その挿絵に橋本雅邦、鈴木華邨、寺崎廣業、富岡永洗、水野年方があたる。1902年第12回日本絵画共進会・第7回日本美術院連合絵画共進会に《春宵怨》（今日、代表作とされる）を出品

し銀牌受賞。1907年には新派の国画玉成会創立発起人となり評議員。同年勸業博覧会に《乳海》を出品し二等受賞するも公設展覧会出品の最後となる。1908年から異画会審査員を務めなど、後進の指導に専念。1914年44歳で発病し病身療養につづく、1917(大正6)年4月23日逝去。染井墓地に埋葬。門下には小林古径・前田青郎・新井勝利・奥村土牛などがある。

肉筆絵画以外の業績では、1894年1月28日発行の半古木版墨摺画集『したり柳』(賀川弥二郎発行)は彫師名人の片岡雄六・滝本直山・片岡藤二郎を結集させた明治を代表する精緻な一冊である。新聞挿絵では1900年1月読売新聞の長田秋濤・尾崎紅葉訳「寒牡丹」、5月から8月の柳川春葉「夢の夢」、8月から11月の徳田秋聲「雲のゆくへ」、12月から翌年にかけて紅葉の「続々金色夜叉」等、その後も主に読売新聞で活動。代表作は1903年の小杉天外「魔風恋風」と幸田露伴「天うつ浪」等で1905年頃まで。自作図案集では1904年『和かくさ(若草)』5冊(春陽堂)。装幀・挿絵の仕事の例として上田萬年解説『新訳伊蘇普物語』(鐘堂 1907.11)、博文館の『世界お伽草』など。著書に『画事入門』(博文館 1908.11)。その他、石版絵葉書にもシリーズ制作もあり多数描いて好評であった。【文献】『梶田半古の世界展』図録(特年譜参照 そごう美術館 1994)(岩切)

梶原茂信(かじはら・しげのぶ)

1913(大正2)年広島県尾道市に生まれる。1927年頃、友人と文芸同人誌を発行したことがきっかけで謄写版にふれ、1930年頃から本格的に取り組むようになり、戦前から謄写版による創作版画の制作を提唱していた小泉與吉と交流があった。1946年に神戸市で淀勇らと神戸孔版社を創立、のちに「兵庫孔版」を開業した。印刷業のかたわら謄写版誌『こうはん』(創刊号誌名は『どんぐり』、のち『孔版研究』に改題)を創刊した。この謄写版誌は、各地の技術者、孔版画家をつなぐ役割をはたしたが、梶原は技術指導記事執筆や編集のほか、戦後、印刷技術の進展にともなって次々に発表された新しい技術や素材を制作に取り入れ、毎号のように表紙絵や口絵を謄写版によって制作している。1947年に京都で開催された全日本謄写印刷展を皮切りに、展覧会への出品もはじめており、1952年の西日本孔版画家協会の創立にも加わった。若山八十氏によると、一時、謄写版印刷業からはなれたが、晩年は郷里の尾道で孔版画の制作を続けたという。【文献】黒水武夫編『後塵録』(日本謄写美術協会 1947)／『組合史』(社団法人日本軽印刷工業会大阪支部・阪府印刷業協同組合 1978)／前田繁治『組合史資料』(文献社 1977)／若山八十氏「孔版家列伝—ガリ版文化をつくった人々」『ガリ版文化史』(新宿書房 1985)(植野)

柏木武夫(かしわぎ・たけお)

版木会発行の創作版画集『版』第5輯(1937.5)、第7輯(1937.7)スタンプ集に各1点の木版画を発表する。版木会は同誌に掲載されている校章や題材から愛知県知多郡師崎町(現・南知多町)の学校(当時・師崎町立師崎中学校)の版画同好会と考えられる。(加治)

柏川一雄(かすかわ・かずお)

1938年8月8日に新潟県羽根郡柏崎小学校において

講師西田武雄によるエッチング講習会が開かれた。当時、柏崎町比角小学校の教師であった柏川は講習会に参加。そこで制作したと思われるエッチング作品が日本エッチング研究所機関紙『エッチング』第70号(1938.8)に掲載されている。また、第71号(1938.9)には「はじめてエッチングを知って」と題した感想を寄稿している。【文献】『エッチング』70・71(加治)

数見定一(かずみ・ていいち)

東京の生まれか。1907(明治40)年東京美術学校彫刻科予備科に入学し、1912年同校を卒業。同年の光風会第1回展に木版画《静物》《立樹》を出品。版画の出品はこの回のみで、1918年の第6回展には銅版打ち出しの《耕作》《羊の群》、1919年の第7回展も銅版打ち出し装飾額《孔雀》《馬》を出品。その後、中断があり、1935年の第22回展に《花模様革テーブル掛》を再び出品。翌1936年の第23回展に出品した《革ハンドバック》など3点でN夫人賞受賞。1938年の第25回展で工芸部の会友に推挙され、第26・27・29・31回展にも出品した。その後の活動は不明。【文献】『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第二巻』(ぎょうせい 1992)／『光風会史—80回の歩み—』(光風会 1994)／『第85回記念光風会目録集』(光風会 1999)(三木)

片岡京二(かたおか・きょうじ)

1934年7月1日、西田武雄エッチング研究所で行われた慶應義塾普通部生徒の講習会に参加。『エッチング』No.21(1934.7)誌上に図版《風景》が掲載される。【文献】『エッチング』21(樋口)

片岡重春(かたおか・しげはる)

大阪で発行された文芸同人誌『同心草』第15号(1930.8)に《監獄に浴ふ道》、第16号(1930.12)の表紙絵には凸版《あざみ》を発表。また同誌には版画誌『BLACK』第2輯に《あざみ》を発表したとあるが、現在『BLACK』誌は未確認。【文献】『BLACK』について『同心草』16(1930.12)(加治)

片岡球子(かたおか・たまこ) 1905～2008

1905(明治38)年1月5日北海道札幌市の醸造業、材木商の家に生まれる。1923年札幌高等女学校師範科を卒業するが、同年女子美術専門学校日本画科高等科に入学。1926年同校を卒業し、横浜市立大岡尋常高等小学校の教員となる。その後30年間教員生活を続けながら、傍ら日本画の制作に励む。当初は吉村忠夫に師事し、帝展に出品するも落選を続け、その後中島清之の勧めで院展に出品。1930年再興第17回日本美術院展で初入選を果たすも、その後も入選と落選を繰り返す。1939年第26回院展に《緑陰》入選し、院友に推挙され、以降は毎回入選。1946年からは日本美術院賞を3度受賞。1952年第37回院展で日本美術院賞、大観賞を受賞し日本美術院同人となる。1955年横浜市立大岡小学校を退職し、女子美術大学日本画科専任講師、その後助教授を経て1965年教授となる。1966年愛知県立芸術大学日本画科主任教授に就任。1989年文化勲章受章。2008(平成20)年1月16日藤沢市で逝去。版画制作は、1936年10月24日開催の日本エッチング研究所主催、横浜美術協会後援の横浜講習会と11月4日開催の横浜大岡小学校講習会に参加。同講習会について『エッチング』49号(1936.11)

には、「片岡球子先生は美術院の院友でもあり、生徒も横浜一の多数を擁する盛んな学校である」と記されている。戦後は1964年日本美術家連盟で、摺師・木村希八の勧めで初めてリトグラフ《水仙》を手掛け、その後は主に富士山をモチーフに晩年まで110点余のリトグラフ作品の制作がある。【文献】『エッチング』49／神奈川県立近代美術館編『近代日本美術家列伝』（美術出版社 1992）／『片岡球子 全版画』（榊マリア書房 2007.7）（樋口）

片岡靖忠（かたおか・やすただ）

1933年7月6日、西田武雄の日本エッチング研究所にて第5回エッチング座談会が開かれ、建築家の片岡も参加（『エッチング』9 1933.7）。片岡は同研究所機関誌『エッチング』第10号（1933.8）、第11号（1933.9）、第14号（1933.12）にエッチング作品を発表。また、第37号（1935.11）では「建築家でエッチャー」として『新日本建築』を発行したと紹介されているが、雑誌『新日本建築』は未確認（『エッチング』37）。なお、『エッチング』10号では片岡忠靖とあるが、同一人と判断。【文献】『エッチング』9・10・11・14・37（加治）

片切 勝（かたぎり・まさる）

横浜高等工業学校在学中に西田武雄の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第14号（1933.12）にエッチング作品を発表。【文献】『エッチング』14（加治）

片田節郎（かただ・せつろう）

1919（大正8）年2月神戸で洋画展覧会（1～3 神戸倶楽部）を開き、油絵・水彩のほか、エッチング・モノタイプを並べる。同展を紹介した『みづゑ』169号（1919.3）の記事では、パリのアカデミー・ジュリアンで学び、一等賞を受賞した〔研究所内のコンクールか〕ことが伝えられている。また、東京に引き続き、同年5月に大阪で開かれた日本創作版画協会第1回展〔大阪展〕（1～8 大阪・三越）に応募し、銅版画《ゲリー街》《座裸婦》《停車場》《グランド・アベニュー》の4点が入選したが、その後の活動は不明。【文献】『みづゑ』169／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）（三木）

片山春帆（かたやま・しゅんぱん） 1880～？

挿絵画家。『此花』第4枝（雅俗文庫 1910.4）の「現今浮世絵師」欄「四」の「片山春帆」項目に「師門 武内桂舟 大出東皐 河合玉堂／俗称 片山春雄／年齢 三十一（明治十三年生）／生地 東京築地／現住 東京市牛込区新小川町一丁目十二番地」とある。仕事の例として、1897年の村井弦斎著『日出島 曙の巻（上）』（春陽堂）の口絵、また、博文館専属の挿絵画家で特に『中学世界』、『文芸倶楽部』、『女学世界』などでの活動が知られる。また1926年発行『大正震災画集』第5輯（日本版画社）《其夜の原宿》（大正十二年九月春帆写）、《逃げ場を失った花園池》（大正癸亥秋日春帆写）とする木版多色摺の2図がある。【文献】『日本美術年鑑』（1973年版）など（岩切）

片山二郎（かたやま・じろう）

兵庫県で発行された西日本新版画創作普及協会の機関誌『西日本新版画』第3年2輯（1938.7）に《ふさあなす》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

片山 一（かたやま・はじめ）

1931年8月3日～7日、九州で初めての版画講習会（主催：東京創作版画倶楽部 講師：平塚運一）が、武藤完一の勤務していた大分県師範学校において開催された（『郷土図画』1931.10）。武藤は記念として講習会で制作された作品を台紙に貼り版画誌『彫りと摺り』（1931～1932）として発行した。当時、片山は大分県速見郡亀川校の教師であった関係で、講習会に参加したと思われる。その後『彫りと摺り』やその改題誌『九州版画』の会員となり、数多くの木版画を制作。『彫りと摺り』第1号（1931.9）の《自画像》をはじめ、第2号（1931.11）に《つはぶき》、第3号（1932.1）に《三匹猿》、第4号（1932.6）に《凝視》を発表。その作者言では「何かを見つめてみる妹を版にして見ました。（中略）結果を観ます時、荒ごなしだと思います。いつか一度は力作を！（以下略）」と書いている。その後、第6号（1932.12）に《秋深む》、第7号（1933.3）に《橋のある朝見川》を、そして改題された『九州版画』の第1～3、5、9、13号（1933～37）にも作品を発表。その第24号（1941.12）掲載の会員名簿や『エッチング』第47号（1936.9）の大分エッチング座談会では、所属が別府中学校となっており、1936年の年賀状による住所は別府曙通り五丁目になっていることから、1935年には別府中学校に転勤したと考えられる。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」（『大分県立芸術会館研究紀要』第1号 2002）／『創作版画誌の系譜』（加治）

勝木貞夫（かつき・さだお） 1910？～1935？

版画誌『爆竹』を通じて交流のあった小野忠重によれば、生年は1910年（明治43）頃、没年は1935年（昭和10）とされる。出身地不明。『爆竹』の編集同人として活動し、1929年発行の同誌3号に《姉弟》（木版）を、4号に《港の朝》（木版）を掲載。また1930年発行の同誌6号に《職場のかへり》（木版）を寄せた。4号から6号までは編集後記も執筆している。この版画誌は第6号あたりからプロレタリア美術への指向が認められ、7号にはその性格が明確化しているが、勝木はちょうどそれらの号が発行された1930年に木版画《メーデー》を制作している。しかしプロレタリア美術大展覧会への出品は確認できない。【文献】小野忠重『近代日本の版画』（三彩社 1971）／『創作版画誌の系譜』（滝沢）

香月泰男（かづき・やすお） 1911～1974

1911（明治44）年10月25日山口県大津郡三隅町に生まれる。本人の回想によれば、小学校4年の時には、絵描きになる決心をしていたという。1929年県立大津中学校卒業。上京して川端画学校に学び、1931年2度目の受験で東京美術学校西洋画科に入学。在学中から梅原龍三郎に憧れ、1934年国画会第9回展に初入選。1936年同校卒業後、北海道庁立俱知安中学校に美術教諭として赴任。1938年山口県立下関高等女学校に転任する。1939年第3回文展に油彩画《兔》が特選、福島繁次郎の知遇を得る。1940年国画会第15回展で同人に推挙され、佐分賞を受賞。1942年召集され、満州に出征。終戦後2年間シベリヤ抑留を経て1947年帰国。戦後は郷里で高等女学校の図画教師の傍ら国画会を中心に発表を続け、1962年以降は無所属に。自身の抑留体験をもとに『シベリヤ・シリーズ』（57点）を制作して注目される。1966年九州産業大学芸術学部油彩科の教授となる。1968年第

27回西日本文化賞。1969年『シベリア・シリーズ』に対して新潮文芸振興会第1回日本芸術大賞受賞。1974(昭和49)年3月8日三隅町の自宅で逝去。版画制作は、1935年美校の4年次に、当時開設された臨時版画教室木版部に在籍し平塚運一の指導を受ける。作品は未見。戦後は1956年日本美術家連盟基金として制作の石版画《猫柳》をはじめ、『シベリア・シリーズ』(1969)、『母子像』(1971)、『裸婦』(1971)や国内外に取材した『北海道』(1971)、『パリの屋根』(1971)、『ギリシャ』(1972)、『モロッコ』(1973)などの石版画集や銅版画集『五月七日上野動物園にて』(1970)、木版画集『タヒチ』(1973)、『ニース』(1974)など、1956～1974年にかけて160点余の版画制作がある。【文献】『香月泰男全版画集』(阿部出版 1990)／『グループ〈貌〉とその時代展』図録(郡山市美術館 2000)／『没後30年 香月泰男展図録』(山口県立美術館 2004) (樋口)

勝田 哲 (かつだ・てつ) 1896～1980

1896(明治29)年7月8日京都市に生まれる。本名哲三。1920年東京美術学校西洋画科を卒業するが、日本画に転じ、京都市立絵画専門学校に入学。山元春挙に師事する。1930年同校研究科卒業。歴史画、美人画を能くし、帝展、新文展で活躍。1936年より京都市立美術工芸学校に勤務。戦後は市立日吉ヶ丘高等学校で後進を指導する。1980年京都市文化功労者。1980(昭和55)年11月17日逝去。版画は、京都画壇の若手22名の書下ろし作品36図を集めた『新進花鳥画選』(マリア書房 1931～1933)に木版画《[花]》を制作。【文献】『山田書店新収美術目録』81(2008春)／『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998) (樋口)

勝平得之 (かつひら・とくし) 1904～1971

1904(明治37)年4月6日秋田市鉄砲町に生まれる。本名は徳治。秋田の風景・風俗・行事などに取材した独自の木版画で高い評価を受けている。高等小学校を卒業後、家業の紙漉きと左官業を手伝う。版画は1924年頃に独学で始め、1927年には秋田魁新報に投稿した墨摺りの版画が採用されている。1928年秋田で開かれた農民美術研究所の講習会で、木彫家木村五郎の指導を受け、木彫りの風俗人形や秋田犬を制作。10年間ほど販売して家計を助けた。またこの年、色刷り版画の技法を習得し、画号を「得之」と定めている。1929年日本創作版画協会第9回展に最初の多色木版《八橋街道》《千秋園外濠夜景》の2点を出品し、初入選。翌1930年は第3回卓上社展に《雪景》《草生津川の秋》《雪》が入選した。この頃から本格的に版画に取り組むようになり、1931年には数多くの展覧会に出品。1月の第8回白日会展に《聖園》、4月の第6回国画会展に《雪国の村里》、5月の第8回日本水彩画会展に《十和田湖発荷峠》、6月の新興版画会第1回展に《竿燈勢揃之図》《梵天奉納之図》、9月の第1回日本版画協会展に《秋の奥入瀬》、10月の第12回帝展に《雪国の市場》がそれぞれ入選し、勝平の版画が一気に世に知られるところとなった。翌1932年に日本版画協会の会員に推挙され、同年の第2回展から1944年の第13回展まで連続して出品。また、帝展とそれに続く文展には、第13回展(1932)、昭和11年文展無鑑査展(1936)、第1回新文展(1937)、第2回新文展(1938)、第3回新文展(1939)、紀元2600報祝展(1940)、第6回新文展(1943)と入選を重ねた。また、国画会展(7・

12・18・19回)や光風会展(21・22・29回)にも出品するなど、ひたむきに作品制作と取り組んだが、その親しみやすい作風は多くの人に支持された。1933年に来日した建築家ブルーノ・タウト(1880～1938)もその一人で、その著書『日本の家屋と生活』(英文 三省堂 1936)の口絵に勝平の手摺木版画《秋田の冬の市》を使っている。戦後は、1946年の第2回日展に《盆市》を出品。以後、1953年と1954年の第9・10回展を除き、1957年の第13回展まで出品。1956年と1957年は委嘱出品だった。また、日本版画協会へは1949年の第17回展に《ろばた》を出品して復帰。1950年の第18回展を除き、1958年の第26回展まで出品したが、1960年に退会し、同年の日展出品版画作家による「日本版画会」に参加している。その間、1952年にはドイツのケルン博物館で個展が開催され、出品作の《秋田風俗十題》など60余点が収蔵された。また、永年の功績と独自の版画芸術に対し、1951年第1回秋田市文化功労章、1954年秋田魁新聞社七十周年記念文化功労章、1962年第11回河北文化賞、1963年第8回秋田県文化功労章が贈られている。1971(昭和46)年1月4日秋田市で逝去。【文献】『勝平得之木版画集』(河北新聞社 1968)／『勝平得之全作品集』(秋田文化出版株式会社 1992)／『勝平得之作品集 版画[秋田の四季]』(秋田文化出版株式会社 2001)／昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

勝平とみじ (かつひら・とみじ)

秋田県に生まれる。勝平得之の実弟。「とみぢ」の表記もあり。1931年に中島重太郎の創作版画倶楽部が組織し、平塚運一らが審査員を務めた新興版画会第1回展に木版画《街道》など4点が入選した。【文献】『版画 CLUB』3-1・4-1 (三木)

勝俣喜一 (かつまた・きいち)

西田武雄が発行した日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第73号(1938.11)にエッチング作品を発表。当時、慶応義塾普通部3年に在学。【文献】『エッチング』73 (加治)

勝村鐘造 (かつむら・しょうぞう)

1932(昭和7)年3月20日から4月10日まで上野桜ヶ丘で開催の日本美術協会工芸・彫刻展で、版画が銀賞受賞。日本木版工芸組合出版の錦木清方木版画《築地明石町》(1931)の彫師として知られる。【文献】『美之図』8-4(1932.4) (樋口)

桂木正長 (かつらぎ・まさなが)

版木会発行の創作版画集『版』第5輯(1937.5)に木版画2点、また第6～7輯(1937.6～7)、第10～12輯(1937.10～1938.1)に木版画各1点を発表する。版木会は同誌に掲載されている校章や題材から愛知県知多郡師崎町(現・南知多町)の学校(当時・師崎町立師崎中学校)の版画同好会と考えられる。また『版』は第12輯までの発行を確認しているが、第1,3,4,8,9輯は未確認である。【文献】『版』5・6・7・10・11 (加治)

門戸澄子 (かど・すみこ)

長野県須坂の信濃創作版画研究会が発行した版画誌

『櫟』第13輯(1937.6)に《賀状》を寄稿。武井武雄主宰の年賀状交換会「櫟の会」会員(『櫟』13)。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」』『臥竜山風景版画集』(須坂版画美術館 1999)／『創作版画誌の系譜』(加治)

加藤喜一郎(かとう・きいちろう) 1901～1987

1901(明治34)年名古屋市に生まれる。1923年鬼頭鍋三郎、松下春雄、中野安治郎らと洋画グループ「サンサシオン」の結成に参加。1924年第2回サンサシオン美術展覧会(4.18～20 会場・愛知県商品陳列所)に版画《園》(版種不明)を出品。1930年頃サンサシオン社を退会、医学の道に進む。1987(昭和52)年逝去。【文献】『第2回サンサシオン美術展覧会目録』(1924.4)／中山真一『愛知洋画壇物語』(風媒社 2011) (樋口)

加藤邦夫(かとう・くにお)

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)に在学中、長谷川勝四郎ら同校生徒による版画誌『刀』(1928～1932)の創刊に参加。その第1輯(1928)に《独火》、第2輯(1928)に《色硝子》、第3輯(1928)に《猫ト金魚》、第4輯(1929)に《風景》を発表する。1929年同校を卒業。【文献】『版画をつづる夢』展図録(宇都宮美術館 2000)／『創作版画誌の系譜』(加治)

加藤従吉(かとう・じゅうきち)

東京の料治熊太が発行した版画誌『版芸術』第23号(1934.2)「万国芸土俗玩具号」に《豚を擔ぐ泥人形(台湾)》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

加藤順澄(かとう・じゅんちよう)

1938(昭和13)年の第13回国画会展に木版画《老人B》が入選。出品時は新潟県北蒲原郡乙村古館に住む。【文献】『第十三回国画会展覧会目録』(1938) (三木)

加藤泰三(かとう・たいぞう) 1911～1944

1911(明治44)年2月27日東京本郷に生まれる。父は彫刻家の加藤景雲。1926年京北中学に入学。1928年頃から山登りを始める。1930年同校を卒業し、東京美術学校彫刻科木彫部に入学。石井鶴三に彫刻を学ぶかわら、校友会版画部の活動に参加。1932年7月に校内で開かれた第14回版画部展覧会に出品している。また、映画部にも所属し、仲間と映画同人誌を創刊(1930)。映画館のプログラムの装幀(1932～1933)なども手がけた。さらに、1933年には『詩集 仄かなるもの』(のち1986年に加藤泰三遺作刊行会から刊行)をまとめ、1934年からは短歌雑誌に投稿するなど多才であった。1935年同校を卒業し、横浜の小学校などに勤務。翌1936年再興日本美術院第23回展に木彫《鯉》が初入選。以後、1942年の第29回展まで連続して彫刻を出品。1938年には日本美術院院友に推挙された。その間、1937年府立第四中学校に勤務。1938年から山の雑誌『山小屋』『山と高原』に表紙絵・カット・随筆などを発表。1941年には山登りの歓びやその想いをまとめた画文集『霧の山稜』(朋文社)を刊行。また、1942年の第11回日本版画協会展に木版画《登山具》《山頂》が入選している。1942年8月応召。1944(昭和19)年6月25日西部ニューギニア・ビアク島で戦死した。【文献】加藤泰三『霧の山稜(平凡社ライ

ブラリー257)』(平凡社 1998)／伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部 1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』図録(和歌山県近代美術館・宇都宮美術館 2010)／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三卷』(ぎょうせい 1997)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

加藤大道(かとう・だいどう) 1896～1965

1896(明治29)年9月1日南安曇郡安曇村橋場に生まれる。本名は浅野健一郎。1912年波多尋常高等小学校高等科を卒業し、東京の通信講習所に入所。同年、祖父の養子となり、加藤姓を名乗る。1914年電信師の資格をとり、塩尻郵便局に勤務するも、画家を志し、1918年松本出身の南画家赤羽雪邦の内弟子となり上京。号は雪深。1921年師の勧めにより南画研究のため中国へ渡り、1923年帰国。帰国後は、大阪在住の元東京美術学校彫刻科教授で、文人画復興を提唱していた白井雨山に師事。1925年独立して東京に住み、南画の制作に励む。1927年結婚し、号を「大道」と改める。翌年長男重治(二代大道)が生まれ、妻子をつれて帰郷。1933年農民美術運動を提唱していた山本鼎の指導により、同志と共に「日本アルプス山岳芸術研究組合」を組織。青年有志に木彫・染色・版画の推奨・指導を行い、自らも自画・自刻・自摺の木版画を制作するようになった。その後、制作の場を「版画荘」と名づけ、1937年から「創作木版画頒布会」を組織し、「童心的な山村風俗、信濃風景、高山植物その他」を主題とした作品、版画を貼った絵葉書、木版画和紙箋などを毎月頒布。その広告記事の一例は、1943・1944年の雑誌『民藝』に見ることが出来る。1941年右眼失明。1943年には左眼も悪化したという。戦後も農事に励みながら版画制作を続け、1946年には長野の著述家古村青山の発起で『加藤大道版画選集』に着手し、1948年全2巻を刊行。続いて、同年(1948)相馬御風との共作『童心帖』(相馬の信州に於ける作歌に大道が挿画)の制作に着手するも、御風の死(1950没)によって版画10枚で中断したという。またこの1948年には、長崎の原爆で病床にあった永井隆博士との交流が始まり、1950年木版画集『原子野の花』(原画は永井隆、一説には1951完成)を制作したが、永井の死(1951没)によって中断。その後、続刊(1952か)がまとめられたようである。1957年長男重治の住む松本市に転居したが、病気のため木版画の制作からは離れた。1965(昭和40)年10月29日同地で逝去。【文献】神津良子『清貧の芸術家・加藤大道父子の軌跡 版画荘二代記』(郷土出版社 2005)／『長野県美術全集<第8巻> 信州の水彩画と版画芸術―斬新な才気と多彩な美術運動』(郷土出版社 1993)／『民藝』5-4～6-7 (三木)

加藤太郎(かとう・たろう) 1915～1945

1915(大正4)年3月8日神戸市に生まれる。のち東京代々木に移り住む。東京府立工芸学校在学中の1932年、第9回白日会展に油彩画《郊外風景》《曲馬団》が入選。同年同校金工科を卒業。同舟舎絵画研究所に学び、杉全直を知る。1933年東京美術学校油画科予科に入学。演劇を好み、校友会の舞台芸術部にも所属。同級生の石川[杉原]正巳と深く交友。1936年「臨時版画教室」(1935開設)で平塚運一に木版画の指導を受ける。1937年同級生の石原寿市、杉全直、杉原正巳、若松公一郎らとシュールレアリスム傾向のグループ「貌」を結成。1939年かけて4

回の展覧会を開催し、同人誌『JEUX D' ESPRIT』(1938.4～1939.4 8冊か)を発行。同誌に木版画も発表した。また、この年(1937)の第6回日本版画協会展に木版画《三チャン像》《I君像》《S氏像》《M子像》の4点が初入選。翌1938年東京美術学校油絵科を卒業。同年の第13回国画展に木版画《夜》《函製造》の2点、日本版画協会第7回展に《顔(A)》など6点がそれぞれ入選。1939年第14回国画展に木版画《アトリエ》《広場》の2点を出品。この年千葉の戦車部隊に応召されるも、1941年除隊。1942年の第3回美術文化協会展に油彩画《風景》《樹》を出品し、美術文化賞受賞。同年再び応召されるも、1944年病を得て除隊。帰郷後は制作に集中し、恩地孝四郎の主宰する版画研究会「一木会」に杉原正巳と参加(一説では1939年頃)。一方で、日本版画協会会友、美術文化協会会員にそれぞれ推挙され、第5回美術文化協会展に油彩画《馬》《馬具》を出品。また、第13回日本版画協会展には《ハイトリナデシコ》など5点を出品し、会員に推挙された。さらに、杉原正巳と木版画集『版画集』(私家版 各10点か)をまとめ、一木会の版画集『一木集 壱』(1944.9)に《四葉》を発表。1945年には木版画集『JEUX D' OBJET 1』『JEUX D' OBJET 2』(私家版 10部限定)をまとめている。同年(昭和20)6月7日(一説には5月8日)肺結核のため東京で逝去。5月末の空襲でアトリエが焼け、多くの作品を失ったが、翌1946年の第14回日本版画協会展に遺作の特別陳列があり《顔の習作》など21点が並び、同年の第6回美術文化協会展でも遺作の特別陳列が行われた。また、1950年には恩地孝四郎・山口源・関野準一郎・杉原正巳との共著『一木会豆版画帖 博物譜』(恩地孝四郎編 青園荘 250部限定)が出版された。同書は、5人が5つのテーマを分担し、「木」をテーマとした加藤の木版画《実》など5点も収められている。当初は1945年頃に出版が計画されたものであり、恩地は「既に戦時中に成さるべきを機を逸した。青園荘の見出す所となり数年後の今日上梓を得た次第である。その間、作者加藤、杉原両友を失った。共に病床に逝いたが間接の戦禍である。無念やる方ない。両君最後の著書として世に送ると共にこの刊本を両君に捧げる。嗚呼。」と記す。【文献】『一木会豆版画帖 博物譜』(青園荘 1950) / 『グループ＜貌＞とその時代』展図録(郡山市立美術館 2000) / 菅野洋人「加藤太郎について」『郡山市美術館紀要』2(2001) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

加藤長一(かとう・ちょういち) 1917～没年不詳

1917(大正6)年8月東京市淀橋区角筈に生まれる。東京府立第二中学校卒業後、川端画学校に学ぶ。1936年東京美術学校油画科に入学。藤島教室に学ぶ。在学中の1940年に第9回日本版画協会展に木版画(銅版画の誤記か)《すみだ川》が初入選。1941年同校卒業。同年の第10回展に銅版画《牛(一)》《牛(二)》を出品。翌1942年陸軍第26部隊に応召されるが、作品を準備していたのか同年の第11回展に銅版画《麦と女》を出品。1944年日本版画協会会員に推挙されるも、当時は陸軍中尉として中国に出征中であつた。戦後の活動は不明。1972年頃は藤沢市に住む。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『日本版画協会会報』37(1944.3) / 『同窓生名簿 東京美術学校 東京芸術大学美術学部 東京芸術大学大学院美術研究科』(同窓会名簿編集委員会 1972) / 『東京芸術大学百年史 東京

美術学校篇 第三巻』(ぎょうせい 1997) (三木)

加藤 悌(かとう・てい) 1912～1943

1912(明治45)年4月16日東京に生まれる。1933年東京高等工芸学校印刷科を卒業。共同印刷株式会社技師として勤務。木版による玩具絵を得意とし、料治熊太の主宰する『土俗玩具集』(1934.6～1935.3 10冊)、『おもちゃ絵集』(1936.3～12 10冊)の常連として作品を寄せたほか、『版芸術』の第4巻第12号[45号](1935.12)では「東東海道郷土玩具集」が、第5巻第10号[55号](1936.10)では「暹羅土俗玩具集」が、それぞれ個人版画集としてまとめられている。また、1936年の第5回日本版画協会展にも木版画《シヤム土産》を出品した。1943年日本版画奉公会会員。当時の住所は東京都小石川区高田豊川町。同1943(昭和18)年9月9日東京で逝去。【文献】『第五回日本版画協会展出品目録』 / 『エッチング』126・128 / 『創作版画誌の系譜』 (三木)

加藤哲之助(かとう・てつすけ) 1904～1958

1904(明治37)年北海道島牧に生まれる。戦前の北海道を代表する版画家の一人で、北海道や札幌の風景に取材した木版画を数多く制作している。経歴に不明な点も多いが、一時、郵政局に勤めていたこともあるらしい。1926年に札幌で版画の個展を開催。同年詩と版画の雑誌『さとぼろ』第3巻第2号(1926.10)に木版画《風景》を発表。翌1927年には「菊池良吉、加藤哲之助洋画二人展」を開催し、油絵と版画を出品した。1932年の第8回展より北海道美術協会展に版画を出品するようになり、1934年の第10回展でフローレンス賞を受賞。1937年の第13回展に《風景》《池中風景》の2点を出品し、会友に推挙されている。また、1933年からは中央展にも出品し、同年の第3回日本版画協会展に《汽船》《大倉シヤンツエ》《江差港》の3点が初入選。翌1934年には第21回光風会展に《棧橋風景》が初入選。1935年からは再び日本版画協会展に出品し、同年の第4回展に《海》《豊平橋(札幌十五図の内)》の2点、1936年の第5回展に《ラグビー》《汽船》の2点、1940年の第9回展に《アイヌ酋長》《唐黍焼き》の2点がそれぞれ入選している。戦後は、1954年の札幌版画協会の結成に参加。翌年から展覧会を開いた。1958(昭和33)年札幌で逝去。【文献】今田敬一編『北海道美術史 地域文化の積みあげ』(北海道立美術館 1970) / 『札幌の絵画(さとぼろ文庫17)』(北海道新聞社 1981) / 苦名直子『画家たちの札幌一雪と緑のメモワール(ミュージアムアム新書⑨)』(北海道立近代美術館 1999) (三木)

加藤照子(かとう・てるこ)

東京府立第三高等女学校に在学中、西田武雄が発行の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第18号(1934.4)にエッチング作品を発表。(註・『エッチング』には「麻布高二女」となっているが、麻布区にあったのは府立第三高等女学校)【文献】『エッチング』18 (加治)

加藤正雄(かとう・まさお) 1898～1987

1898(明治31)年東京に生まれる。1922年早稲田大学建築科卒業。陸軍省に勤務。同年、三科インデペンデント展に出品。1923年岡田龍夫と二人展を開催。その後はマヴォに加わり、『マヴォ』第2号(1924.8)に《ある等差級数の画面的構成》、第4号(1924.10)に《愉快

なる城門」の2点のリノカット作品を制作。1924年11月画廊九段での第1回首都美術展覧会に《あるデザイン テイクな女の享乐的準備のために》など2点を出品。後に建築家として活躍。1987(昭和62)年逝去。【文献】『大正期新興美術資料集成』(国書刊行会 2006) / 滝沢恭司「マヴォの版画」『町田市立国際版画美術館紀要』8(2004)(樋口)

加藤まさを(かとう・まさを) 1897～1977

1897(明治30)年4月8日静岡県志太郡西益津村(現在の藤枝市)に生まれる。本名正男。1910年上京し早稲田中学校に入学。1915年高輪中学校に転じ、1917年同校卒業。同年立教大学予科に入学、翌年英文科に進む。傍ら川端画学校に学ぶ。1919年大学の上級生、岩瀬一民が経営する上方屋平和堂から「まさを」の名前でアンデルセンなどの「童話画集」シリーズや「こどものうた」シリーズの絵葉書を刊行。これが転機で多くの絵葉書を手掛け、その後詩や童謡を発表。1920年童謡画集『カナリヤの墓』(岩瀬書店)、1921年『合歡の揺籃』(内田老鶴園)を刊行。この年立教大学を中退(後に大学のはからいで名誉卒業となる)。1923年『少女俱樂部』3月号に発表の「月の砂漠」の詩と挿絵が評判となり、作曲家・佐々木すぐるが曲をつけ、その後ラジオで流されて人気となる。『少女俱樂部』『少女画報』『令女界』などの少女雑誌や『青い鳥楽譜』シリーズ(佐々木すぐる曲・編集兼発行者)、西条八十『少女詩集』『少年詩集』などの装丁や挿絵、自身の詩画集『涙壺』(内田老鶴園 1922)や『加藤まさを抒情詩集』(春陽堂 1926)、『月の砂漠』(今野書房 1969)の刊行など、絵葉書・装丁・口絵・挿絵・詩や小説などに多彩な活躍を見せた。版画の制作は少なく、『中山晋平童謡小曲集』第1集から第12集(山野楽器 1922.10～1929.8)の木版装丁と『加藤まさを抒情詩集』(春陽堂 1926)の口絵に木版2葉の制作などが知られる。1977(昭和52)年11月1日御宿で逝去。【文献】『山田書店新収目録』36(1999.3) / 『加藤まさををロマンティック・ファンタジー』(国書刊行会 2013) / 『加藤まさをの乙女デザイン展』冊子(常葉美術館・武蔵野市立吉祥寺美術館 2014)(樋口)

加藤八洲(かとう・やす) 1907～1997

1907(明治40)年1月7日東京杉並に生まれる。本名は八木八洲男。初期は「八洲男」その後「安」、「八洲」の署名に。幼時に神戸の親戚の養子となり、加藤姓となる。1922年旧制第二神戸中学校卒業。1929年京都高等工芸学校(現・京都工芸繊維大学)の図案科卒業。1930年九州有田で焼き物デザインの仕事に就く。1933年新聞関係の仕事で新潟県庁に赴任。1935年版画制作を目指して上京し、宮尾しげを、近藤浩一郎に絵画の手ほどきを受ける。1941年平塚運一に師事し、2年間木版画を学ぶ。同期に北岡文雄、前田政雄など。また小泉癸巳男の教えも受ける。1942(昭和17)年の国画会第17回展に《佐渡の人々》が初入選。翌1943年の第18回展に《萬葉四季》を出品し、国画奨学賞を受賞。1944年の第19回展にも《薬師寺東塔》を出品した。戦後は、1947年の第15回日本版画協会展に《乳しぼる乙女》が入選。会員に推挙され、翌年からは「八洲」の名で出品。1981年には名誉会員となっている。また、1949年の第23回国画展にも出品し、翌年の第24回展で国画奨学賞を受賞した。1957年頃より日本各地の秘境に画題を求めて旅し、1969年以降は中国、台

湾、その後はヨーロッパにも旅して、古い街並みや古城、教会、人々、花々などの木版画を制作。また釣りに親しみ、関西の月刊誌『釣の友』の表紙絵を16年間にわたって版画で描く。その中の120点がニューヨーク美術館に「日本の魚シリーズ」として収蔵される。版画集『萬葉花譜』(刊年不詳)や旅の出会いを綴った随筆集『私の旅 花曼荼羅』(東峰書房 1998)の刊行などもある。1997(平成9)年7月8日、千葉県柏市で逝去。【文献】『千葉ゆかりの美術家たち』5(千葉県立美術館) / 『加藤八洲木版画集』(HOKUBU 記念絵画館 2012) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『山田書店新収目録』63(2004秋)(樋口)

加藤 安(かとう・やす) →加藤八洲(かとう・やす)

加藤善壽(かとう・よしとし)

1937年11月13～14日、栃木市内の鈴木賢二宅で開催された日本エッチング研究所の西田武雄講師によるエッチング講習会に参加(13日には宇都宮師範学校の教諭であった内田進久も講師として参加)。受講者は栃木市内の教師を中心とした美術研究団体讃土社の7名である。翌年、西田発行の『エッチング』第64号(1938.2)に《大平山展望(栃木)》を発表。当時、栃木県下都賀郡稲葉小学校に勤務。【文献】鈴木賢二「西田先生をお迎えして」『エッチング』61(1937.11)(加治)

門口文雄(かどぐち・ふみお)

長野県須坂の信濃創作版画研究会が発行した版画誌『櫟』第9輯(1936.4)に《賀状》を発表。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2(版画同人誌『櫟』『臥竜山風景版画集』)(須坂版画美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

門倉芳枝(かどくら・よしえ) 1918～没年不詳

1918(大正7)年横浜に生まれる。神奈川県女子師範学校卒。画家の井上三綱、朝井閑右衛門に師事。在学中に西田武雄の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第26号(1934.12)にエッチング作品を発表。著作に『朝井閑右衛門 思い出すことなど』(2003)がある。【文献】『朝井閑右衛門 思い出すことなど』(求龍堂 2003)(加治)

門永英三(かどなが・えいぞう)

兵庫県で発行された西日本新版画創作普及協会の機関誌『西日本新版画』第3年2輯(1938.7)に《壺》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

角野誠治(かどの・せいじ) →金子誠治(かねこ・せいじ)

門脇正一(かどわき・しょういち)

兵庫県で発行された西日本新版画創作普及協会の機関誌『西日本新版画』第2年1輯(1937.3)に《山茶花》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

金沢三芳(かなざわ・みよし)

長野県下の教師を中心とする下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第3号(1936.7)に《茶わん》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

金島桂華 (かなしま・けいか) 1892～1974

1892(明治25)年6月25日広島県神辺町に生まれる。本名政太。1906年大阪に出て、西家桂州、平井直水に日本画を学び、1911年京都の竹内栖鳳画塾に入る。大正末から昭和初めにかけて3度帝展特選となり、1920年帝展審査員。1930年から1939年まで京都市立美術工芸学校教諭。戦後は日展審査員などをつとめ、1953年第9回日展出品作《冬田》で1954年に日本芸術院賞。1959年同院会員。花鳥画を得意とし、画塾衣笠会を主宰、後進の育成にあたる。1974(昭和49)年9月16日京都で逝去。版画は、当時の京都画壇の若手22名の書下ろし作品36図を集めた木版画集『新進花鳥画選』(マリア書房1931～1933)に《椿》など2図の制作がある。【文献】『日本美術年鑑』1974・75年版／『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社1998)／『山田書店新収美術目録』81(2008春)(樋口)

金森観陽 (かなもり・かんよう) 1882頃～1932

1882(明治15)年4月24日富山市に生まれる。本名小出頼次郎。観陽、鵬南とも号す。幼少の頃に金森家の養子となる。明治期の富山で売薬版画の下絵画家だった尾竹国一の弟子となり画家を志す。その後大阪に出て、菊地契月に師事。文展、新展などに入選し、関西方面で活躍する。白井喬二『新撰組』の挿絵などで知られる。1932(昭和7)4月18日逝去。版画は、『主情派現代風俗版画集』(主情派美術会刊1929頃)第4回頒布予定作家の一人として、木版画《魔窟の女昼寝の図》の広告記事が残るが、刊行の有無は不明。作品も未確認。(生年については、明治15年或は16年、17年の説があるが、ここでは明治15年とする)。【文献】『やなぎや』40?(柳屋画廊1929.5)／『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社1998)／『大阪市立近代美術館(仮称)コレクション展2001』図録(大阪市教育委員会2001)／『富山市ホームページ』39(2000.8)(樋口)

金守世士夫 (かなもり・よしお) 1922～

1922(大正11)年11月24日富山県伏木に生まれる。東京で鉄工所をやっていた叔父を頼って上京し、帝国美術学校(現・武蔵野美術大学)図案科に通っていた頃に、永瀬義郎『版画を作る人へ』を手に入れ、版画に興味を持つようになったという。1941年に『世士夫版画集』(日本絵画スタジオ 表紙を含む全7図)を刊行。1942年同校を卒業(中退したともいわれるが、未確認)。その後、召集され、通信兵として中国に渡る。終戦で富山に復員後、富山県福光町に疎開していた棟方に師事。1950年、棟方志功とともにガリ版刷、30部限定の版画誌『越中版画』を創刊。第2号より『日本版画』と改題。1951年11月に棟方志功が東京へ転居することとなり、第7・8号合併の『棟方特集号』を発行して休刊となる。その後は、地元の版画家を中心にした『富山版画』を1960年頃まで刊行。棟方志功の影響で、志功命名の「河伯洞」から、『版絵・菩薩曼荼羅』に始まる100冊を超える版画本、肉筆本、装幀本を刊行。作風も、初期の棟方志功の仏教的な世界から離れ、「旧約聖書」を題材とする物語の世界へと移る。『物語エリコの街』(1951)、『物語エリア火車』(1952)で2年連続国画会賞を受賞。1958年『イサクの犠牲』がニューヨークのセント・ジェームズ教会「日本版画展」で3等賞となる(1等賞は棟方志功)。この頃から、聖書の世界からも離れ、日本の風土や民族の世界に惹か

れる。1963年頃から、「彫り進み技法」による幻想的な宇宙を表現した「湖山」の連作へと独自の画風を拓いた。「湖山」のテーマでは、戦前はアオイ書房の主人で、戦後は日本愛書会を主宰する志茂太郎のすすめで、手摺木版画本『湖山』(日本愛書会1970 限定150部)の刊行がある。また志茂太郎や今村秀太郎(元・主婦の友に勤務、後に吾八書房経営)との出会いから、蔵書票の制作も多数。1955年日本版画協会会員。1965年国画会会員。1981年富山市文化賞。1994年日本書票協会・第4回志茂太郎賞受賞。1996年富山新聞文化賞。【文献】『版画芸術』81～90・92・98(阿部出版1993.8～1997.12)／『山田書店新収美術目録』87(2009冬)・103(2012冬)(樋口)

金山和平 (かなやま・わへい) 1912～没年不詳

1912(大正元)年11月28日兵庫県に生まれる。1932年兵庫県美術家聯盟第4回展に油彩画《小学校の庭》が入選。1933年神戸市大開尋常小学校に奉職。美術教育に携わる一方、人形劇団を結成し、神戸・西宮・大阪などの学校、児童館などで公演活動を行う。1937(昭和12)年の第12回国画会展に木版画《埋立地風景》が入選。翌1938年の第25回二科展に油彩画《砂あそび》が入選。同年の兵庫県美術家聯盟第16回展にも油彩画《水辺》を出品し、無鑑査に推挙され、その後会員になったようである。戦後は兵庫県小・中学造形教育研究会理事、県社会教育主事、但馬小・中学造形教育研究会会長などを務め、兵庫県朝来郡の旧山東町立梁瀬小学校長(1967～1972)を最後に退職。退職後は地域の文化活動に貢献し、1993年に兵庫県の「ともしびの賞」を受賞した。受賞時は兵庫県朝来郡和田山町に住む。【文献】『第十二回国画会展覧会目録』／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所2006)／『兵庫県美術家聯盟展出品目録』／「ともしびの賞資料」(三木)

金子誠治 (かねこ・せいじ) 1914～1994

1914(大正3)年1月20日北海道空知郡砂川町に生まれる。旧姓は角野。少年期を小樽で過ごし、1927年北海道庁立小樽中学校に入学。同校の図画講師成田玉泉の手ほどきを受け、木版画を始める。また、1929年成田の紹介で、来樽した棟方志功と出会う。在学中の1930年第6回北海道美術協会展(道展)に油彩画《風景》を出品し、初入選。翌年も油彩画が入選した。1932年小樽中学校を卒業。1934年の第10回道展に木版画《運河》など3点が入選。以後、15回展をのぞき1943年の第19回展まで版画を毎回出品し、1938年の第14回展と1940年の第16回展でフローレンス賞を受賞。1941年の第17回展で会友に推挙されている。その間、1937年には小樽市立緑小学校の図画専科教員となり、翌1938年に斎藤清らと「小樽創作版画協会」を結成、版画展を開催した。一方、1938年からは中央展にも出品するようになり、同年の第7回日本版画協会展に《教室》など3点初入選。1939年の第8回展に《ジャケツの児》など3点、1940年の第9回展に《児童生活譜》など3点、1942年の第11回展に《母子》など3点を出品。1943年は不出品だったが、会員に推挙されている。また、1939年の第14回国画会展にも《冬の天狗山》が初入選。1941年の第16回展に《ひるさがり》、1942年の第17回展に《奏楽》(モノタイプ)、1943年の第18回展に《雪の岡》を出品している。1940年教職を辞し、本格的に版画を学ぶため上

京。同年の造型版画協会第4回展に「金子誠二」の名で《支那服の女》など5点を出品。新版画家賞を受賞。翌1941年の第5回展には木版画《もえいづ》など5点とエッチング《小樽風景》5点を出品。会友に推挙されている。なお、1943年の第7回展は不出品だったが、案内状には会員として名を連ねている。また、1940年と1941年の両年には小樽で創作版画による個展を開催。1942年の個展には棟方志功が推薦文を寄せた。1942年病身と戦争のため小樽へ帰り、1945年に結婚。母方の姓「金子」を名乗るようになった。終戦を郷里の砂川で迎え、戦後は同地の高校の美術講師をしていたが、1947年に道展の会員となり、同年の第22回展から1994年の第69回展まで出品。1951年には再び小樽に戻り、親戚の看板店（後のカネコ芸社）を手伝いながら、同年から小樽市展にも出品。1987年には小樽市功労賞（教育文化）表彰を受けている。1994（平成6）年12月22日小樽市で逝去。北海道における創作版画の開拓者の一人であり、亡くなる直前まで旺盛な創作活動を展開し、版画の普及に尽くした生涯であった。【文献】『金子誠治展』図録（市立小樽美術館 1996）／『造型版画協会第四回展目録』（1940）／『造型版画協会第五回展目録』（1941）／『造型版画協会第七回展案内状』（1943）（三木）

金子孝信（かねこ・たかのぶ） 1915～1942

1915（大正4）年9月16日新潟県沼垂町（現在の新潟市）に蒲原神社の宮司の三男として生まれる。1933年県立村上中学校卒業後、新潟高等学校の受験に失敗、上京して川端画学校日本画科に入学。翌年東京美術学校日本画科を受験するも失敗し、皇典研究所（現在の国学院大学）神職養成所に入学。1935年同所を卒業するが、画家を志し、同年東京美術学校日本画科予科に入学、翌年本科に進級。1940年東京美術学校日本画科を卒業するが、その年の12月に新発田で入隊。1942（昭和17）年5月27日中国湖北省で戦死した。金子の生涯は短く、出品歴も新潟出身の美校在校生グループ白貌展への出品のほかは、結城素明が川崎小虎、青木大乗らと結成した大日美術院展の第3回展、第4回展（1939、1941）と紀元二千六百年奉祝日本画展（1940）などに入選歴があるのみ。受験失敗で上京して浪人生活を送る時期に、同郷の野沢寅五郎が発行した同人誌『素焼』第2号（1933頃）に、東京風景を描いた《聖橋》《仁王門の秋》《午後の裏町》《丸の内にて》のゴム版による4点の版画作品を残す。【文献】『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社 1998）／『金子孝信展』図録（新潟市美術館 2014）（樋口）

金子直人（かねこ・なおと）

洋画家宇治山哲平が昭和初期に出身地大分県日田町（現在の日田市）で発行した版画誌『朴ノ木』第2号（1933.7）に《田植》を発表。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1（2002）／『創作版画誌の系譜』（加治）

金子 寛（かねこ・ひろし）

明治期の石版印刷業界誌『虹』第1巻8号（1908.9）に石版画《まき割り》《出歯 スケッチ》《人夫》、第1巻9号（1908.10）に《初秋》《秋の夜は長いものは》《秋が来たとして》、第1巻10号（1908.11）に《王手》を発表。人物描写を得意とする。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

兼行武四郎（かねゆき・たけしろう） 1903～1996

1903（明治36）年11月15日山口県に生まれる。少年期を朝鮮で過ごし、1921年朝鮮総督府立京城中学校を卒業。同級生に山口長男がいた。卒業後は、満鉄に勤めながら水彩画を描き、1923年の第2回朝鮮美術展に水彩画《雲の来る日》《海浜の村》を出品。《雲の来る日》が3等賞を受賞し、李王職買上げとなる。1925年東京美術学校図画師範科に入学。洋画は田辺至の指導を受ける。1928年卒業し、兵庫県御影師範学校（1936年兵庫県師範学校、1943年官立兵庫師範学校、1949年神戸大学教育学部と改編）に奉職。1967年に退職するまで、一貫して教員育成に尽くした。エッチングは1931年から研究を始めたというが、その頃の作品は未見。1933年の『エッチング』第13号（1933.11）にエッチング研究所製のエッチングプレス機所有者として紹介され、第14号（1933.12）から第96号（1940.12）にかけてしばしば作品図版が掲載されている。また、1934年7月には勤務先の御影師範学校に西田武雄を講師に招き、エッチングの講習会を開催。1940年には西田が組織した「日本エッチング作家協会」の会員となり、同年の第1回日本エッチング展に《港》、翌1941年の第2回展に《裏町》、1942年の第3回展に《小湾》を出品している。戦後は、1947年の第3回日展に油彩画を出品し、初入選。その後も1954年の第10回展、1956年の第12回展以降は毎回出品し、1961年の第4回新日展では特選を受賞した。また、1952年の第38回光風会展にも油彩画が初入選。以後毎回出品し、1955年に会友、1958年会員に推挙されている。1996（平成8）年3月8日神戸市で逝去。【文献】『兼行武四郎画集』（兼行武四郎先生「退官記念画集」刊行会 1967）／『エッチング』13・14・17・18・22・33・42・43・72・95・96・101・114・123／『光風会史—80回の歩み—』（光風会 1994）／『今純三とエッチング作家協会 採集する風景 銅版画と考現学の出会い』展図録（渋谷区松濤美術館 2001）（三木）

狩野 馨（かのう・かおる）

1931（昭和6）年6月に堺の島田要が中心になって創刊した『羊土』の第1輯に《都会の風景》（石版）と《六月》（木版）を発表。加治幸子の調査では、島田は当時大阪桜宮小学校の教員であったというが、狩野も大阪の教員だった可能性がある。翌1932年6月の第2回日本版画協会展に《立売掘〔堀〕風景》（版種不明）が入選。また、同年12月発行の『羊土』第2輯《立売堀風景》《裸女立像》（各リノカット）を発表している。【文献】『第二回日本版画協会展覧会目録』（1932）／『創作版画誌の系譜』（三木）

狩野光雅（かのう・こうが） 1897～1953

祖父に狩野芳崖、外祖父に橋本雅邦の出自で、1897（明治30）年1月和歌山県有田郡広村に生まれる。同地の私立耐久中学校卒業後、東京美術学校日本画科に進み、1919年同校卒業。松岡映丘に師事し、新興大和絵会結成に参加。1931年同会解散後は帝展、文展に出品。1935年国画院の結成に参加する。版画制作は、新興大和絵会時代に、松岡映丘とその門下による木版画集『日本新名所図絵』（大和絵画刊行会 山口主計彫摺 1927）に《那智》《波切》、『日本八景』（大和絵画刊行会、西村熊吉彫 1928）に《上高地溪谷》の制作がある。1953（昭和28）年12月27日逝去。【文献】北沢楽天「海士鱈と

狩野光雅君』『美の国』2-4 (1926.3) / 『山田書店新収録目録』22 (1997.7) / 『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998) / 岩切信一郎「日本近代版画資料集成 (1923～1929)』『東京文化短期大学紀要』19 (2002.3) (樋口)

加納精一 (かのう・せいいち)

1936年8月、大分県師範学校で開催の西田武雄を招いたエッチング座談会に参加。当時、大分県女子師範学校の教員と思われる。版画の作品は未見。【文献】『エッチング』47 (樋口)

加納由郎 (かのう・よしろう)

1941(昭和16)年の造型版画協会第5回展に木版画《自画像》《寺院》《風景》を出品。【文献】『造型版画協会第五回展目録』(1941) (三木)

鹿子木孟郎 (かのこぎ・たけしろう) 1874～1941

1874(明治7)年11月9日岡山市に生まれる。本名、宇治孟郎。父長守が商売に失敗し、8歳の頃に叔父鹿子木甚兵衛の養子となる。1888年岡山師範学校教諭・松原三五郎の家塾天彩学舎に入門。松原の大阪の転任などで、1892年上京して小山正太郎の不同舎に学ぶ。1895年文部省教員検定試験に合格。図画教師として彦根中学、藤島武二の後任として津の三重県立尋常中学校、その後埼玉師範学校(浦和)に転じるが、1900年父の死去で退職し、岡山に帰郷。同年12月不同舎仲間の満谷国四郎、河合新蔵、丸山晩霞らと渡米。吉田博、中川八郎らとポストンでの水彩画展が好評で、その売上金で渡欧する。パリで浅井忠の知遇を得、ジャン・ポール・ローランスに師事。日露戦争勃発で、1904年帰国。浅井の住む京都に移り住み、画塾を開いて黒田重太郎、宮崎与平、田中喜作、続いて齊藤与里らが入門。浅井の推薦で京都高等工芸学校講師や聖護院洋画研究所で指導にあたる。第3回太平洋画会展に滞欧作を出品。この年雑誌『美術新報』『明星』誌上などで三宅克己、和田英作らと「水彩画論争」を展開。1905年浅井忠、中沢岩太らと関西美術院を創設。1906年第二次渡欧、再びローランスに師事する。1908年帰国後は、前年急逝した浅井忠の後を継いで1915年まで関西美術院院長を務める。1917年三度目の渡欧を果たし、1918年帰国。下鴨にアカデミー鹿子木下鴨家塾を開塾し、林重義、旭谷左右、更に北脇昇、小林和作、金島桂華、徳力富吉郎ら多くの門人を輩出。その後は大阪にも画塾を開くなど関西に於いて多くの後進を育成した。関西美術会を中心に、太平洋画会や文展、帝展などに出品、一時期文展、帝展の審査員なども務めた。1941(昭和16)年4月3日京都で逝去。なお、版との関わりは、明治末から大正にかけての絵葉書ブームに乗って、京都における牽引役の便利堂から、戦争をポンチ絵風に描いた石版刷『時事漫画 非美術画葉書』第1輯～第4輯(1905.2～5)や『西洋美人はがき』、木版摺『絵はがき嵐山』(1905前半)、『水彩画絵はがき』(1905)など石版、木版、コロタイプによる絵葉書を制作。美術文芸誌『平旦』第1号から第4号(1905.9～1906.1)に裏表紙絵と表紙絵を描くほか、雑誌『方寸』にも一時期参加。制作の経緯は不明だが、三度目の滞欧時に制作したと思われる「1917[年]」刻銘の銅版画《セーヌ河》と制作年不詳の《夕暮れの河》(淡彩)、《人物》の合わせて3点の銅版画の制作が知られている。【文献】『没後50年 鹿子木孟郎展』図

録(三重県立美術館ほか 1990) / 児島薫『明治の洋画一鹿子木孟郎と太平洋画会』(日本の美術9 至文堂 1995) / 『版画 80年の軌跡』展図録(町田市立国際版画美術館 1996) / 『創作版画の誕生』展図録(渋谷区立松濤美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』 / 『明治の京都 てのひらの逍遙』(便利堂 2013) (樋口)

鍋木清方 (かぶらき・きよかた) 1878～1972

1878(明治11)年8月31日東京神田佐久間町に生れる。父・條野探菊(伝平)、母・鍋木婦美。本名健一。1891年13歳で水野年方入門し、のちに「清方」の雅号を受ける。1897年19歳の時、『東北新聞』の挿絵を元旦から掲載、1902年まで描く。1901年烏合会を結成し主要メンバーとなり毎回出品する。1909年第3回文展に《鏡》出品し初入選で褒状、以降文展には継続的に出品。1914年8回文展《墨田河舟遊》が2等賞。1916年には吉川霊華・松岡映丘・結城素明・平福百穂と金鈴社結成。1927年第8回帝展《築地明石町》が帝国美術院賞。1929年帝国美術院会員。1937年帝国芸術院設置され会員に任命。1944年帝室技芸員。戦後は日展で精力的に活躍。1954年文化勲章を受章。1972(昭和47)年3月2日鎌倉雪ノ下の自宅で逝去。谷中霊園に埋葬。

明治期には挿絵は木版であった訳だが、そうした挿絵の活動も重要である。また、口絵でも知られる。口絵版画には木版製と石版製がある。清方は卓上芸術の具体化、職人たちの技術に寄せる信頼から、他の版下画家と比べると前向きな制作を行っている。木版口絵は『文芸倶楽部』に《花吹雪》(1903)を手始めに、単行本巻頭口絵等相当数あって鮮やかな色調を残して今日評価が高い。石版口絵版画、絵葉書などもその印刷の特徴を把握した美人画佳品が多い。画譜として1912年『金色夜叉絵巻』(春陽堂)、1914年の『鍋木清方画譜』(日本美術学院版 木版10度摺5枚と原色版7枚からなる、好評で数回の後版がある)。また肉筆複製の版画作品として、勝村鐘造の彫による作品に、1931発行《築地明石町》(清方公認関与の東京木版技業組合版・摺は三井達也 2年かけて制作。のちに戦後の日本木版工芸組合製作用版・安達豊久監督・摺・北島秀松担当のものがある)、及び1933年発行《薄雪》(9月10日発行 摺・後藤万二郎)、が知られる。主版は原画を写真撮影し、その写真膜を板貼付彫。1935年発行の『註文帳画譜』全4集、共に彫摺精度の高い版画。その他に岡田三郎助、上村松園らと合作で、『大近松全集』附録木版画シリーズ(木谷逢吟刊)に《「鍵の権三重帷子」のおさい》(1923)や濠端十二景之内《柳の井戸》(日本風景版画会 1928頃)などがある。さらに随筆家として代表的な書籍に、『築地川』(書物展望社 1934)、『褪春記』(双雅房 1937)、『こしかたの記』(中央公論美術出版 1961)、『続こしかたの記』(中央公論美術出版 1967)がある。【文献】『柳屋40?』(柳屋画廊 三好米吉編 1928.11) / 水谷長志編「略年譜」『鍋木清方展』図録(東京国立近代美術館 1999) / 『山田書店新収録目録』63 (2004秋) (岩切)

釜田 寛 (かまた・ひろし)

愛知県半田町の教師仲間による版画団体・版刀会が発行した版画誌『運』第5号[1931]に木版画(題名不詳)を発表。現在『運』は5～7・10号(1931～1935)のみを確認。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

神坂雪佳 (かみさか・せっか) 1866～1942

装飾图案家。1866(慶応2)年1月12日〔西暦1866年2月26日〕京都栗田の士族の家に生まれる。本名は吉隆。1881年の16歳の時、鈴木瑞彦に四條派の絵を学ぶも、その後装飾芸術としての图案に強い関心を寄せ、1890年图案家の岸光景に師事し、各種の工芸意匠图案及び工芸制作を学ぶ。一方で、琳派の画風を慕いその画風を取り入れた新たな装飾表現を研究した。京都市立工芸图案調製所主任として業界の图案指導に熱心にあたる。1901年英国グラスゴー国際博覧会を視察及び欧州各地の图案調査の爲に渡欧。1905年には京都市美術工芸学校教諭となる。1906年佳都美会を創設して工芸图案界に影響を与え商品性の高い工芸制作をめざし、功績を残した。1937年フランスから勲三等章を贈られ、翌年には京都美術館の評議員となる。1942(昭和17)年1月4日自宅の嵯峨野宮ノ本町で逝去。墓は京都市東山区祇園町南側・大雲院。戒名は「光照院賢祥観雪佳居士」。なお、弟松濤(辨之助)も画家である。工芸图案集として芸艸堂から出版した主なもので、1902年『染織图案 海路』、1903年『滑稽图案』、1904年『蝶千種』、1909年から1910年にかけての『百々世草』(代表的琳派風图案集)3冊、1934年『うた絵』、など木版多色摺の精巧な木版図版である。その他に榊原文翠、森川曾文らと合作の木版画集『古代風俗画譜』(芸艸堂 1913)に版画の制作などがある。【文献】『琳派の継承 神坂雪佳』(特に小倉実子編の略年譜 朝日新聞社 2003)／『明治・大正图案集の研究』(国書刊行会 2004)／『山田書店新収目録』69(2005冬)(岩切)

上条 豊 (かみじょう・ゆたか) 生年不詳～1950

長野県師範学校二部2年に在学中、同校生徒による版画誌『樹氷』第1号紀元2598年版(1938)に《風景》を発表。1939年同校を卒業。『卒業生名簿 昭和25年』刊行時点の1950〔昭和25〕年で死亡と表記あり。【文献】『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950)(加治)

神村民治 (かみむら・たみじ)

1923(大正12)年の第5回日本創作版画協会展に木版画《風景》が入選。当時、木曾に住む。【文献】『第五回日本創作版画協会展覧会目録』(1923)(三木)

神谷さく子 (かみや・さくこ)

愛知県知多高等女学校在学中に、長野県須坂の信濃創作版画研究会が発行した版画誌『櫟』第13輯(1937.6)に《トランプ》を発表。当時、同校教諭であった岩田覚太郎(『九州版画』13号)に師事。この作品は岩田から『櫟』で紹介したもの。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」(臥竜山風景版画集)』(須坂版画美術館 1999)／『創作版画誌の系譜』(加治)

神谷眞一 (かみや・しんいち)

版木会発行の創作版画集『版』第5～7輯(1937.5～7)、第10～11輯(1937.10～12)に各1～2点の木版画を発表。版木会は同誌に掲載されている校章や題材から愛知県知多郡師崎町(現・南知多町)の学校(当時・師崎町立師崎中学校)の版画同好会と考えられる。なお、『版』(1937～1938)の目次は作者名のみで、タイトルは付されていない。【文献】『版』5・6・7・10・11(加治)

上山二郎 (かみやま・じろう) 1895～1945

1895(明治28)年4月3日東京に生まれる。1914年川端画学校に学び、藤島武二の指導を受けるが、翌年兄夫婦が病没したため退学し、銀座で雑貨小売商を営んでいた父を手伝う。1917年頃には義兄と西欧有名画家の作品写真の輸入販売も行っているが、この義兄は後にイタリアの画材の輸入を始め、神保町に画材店清泉堂を開いたという。その後、銅版画を習得し、1920年の日本創作版画協会第2回展に《朝の窓》など6点が入選。翌1921年の第3回展に《高原の路》など7点、1922年の第4回展に《高原の路》など4点を出品。また、川端画学校の有志で結成された1920年の地平社第1回展にも銅版画《赤倉路》などを出品している。1922年に渡仏し、藤田嗣治らと交友。同年の第15回サロン・ドートンヌには、油彩画3点のほか、エッチング《静物》《果物》《カルタのある静物》の3点が入選した。翌年も第1回サロン・デ・チュイルリー、サロン・ドートンヌなどに油彩画を出品したが、関東大震災の知らせを聞き、1924年帰国。福井市郎〔日本創作版画協会出品時の銅版画仲間〕を頼って、芦屋に住み、長谷川三郎らを知る。同年大阪で「上山二郎滞欧記念個人展覧会」を開き、油絵58点・エッチング6点・モノタイプ8点を展示。また、平塚運一・渡辺進らと版画団体「ルーヴルの会」を結成し、神戸で第1回展(5月下旬、東京展は6月中旬か)を開催。神戸の創作版画誌『HANGA』第4輯(1924.15)にもエッチング《静物》の図版が収録された。版画に関連する活動が確認できるのはこの頃までで、以後は油彩画の発表が続く。同年の第11回二科展に油彩画《金魚と花》(第1回サロン・デ・チュイルリー出品作)が入選。翌1925年に再渡仏。サロン・ドートンヌなどに出品し、1927年帰国。東京で滞欧記念の個展を開き、第6回国画創作協会展に油彩画《寺ある風景》を出品。1928年再び芦屋に住み、吉原治郎らと交友。吉原は「オリジナリティーとパーソナリティーが何より大切なことを口をすっぱくして教えられた。私は一度も上山さんを先生呼ばわりしなかったけれど、私の生涯で最も大きな影響を受けた人はやはり上山さんをおいて他にはないと思っている」という。また、3度目の渡欧を計画するも果たせず、翌1929年東京へ転居。第16回二科展に《エグリズ》を出品。1931年には東京で新興洋画研究所を開いている。1945(昭和20)年8月6日疎開先の八王子で逝去。【文献】金井文彦『上山二郎氏と其の芸術に就いて』『みづゑ』236／『知られざる画家 上山二郎とその周辺 1920年代パリの日本人画家たち』展図録(芦屋市立美術博物館 1994)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／吉原治郎『わが心の自叙伝 ③関西学院高等商業部のころ—上山二郎さんからも最も大きな影響』(神戸新聞 1967.6.4～7.9 6回掲載のうち『没後20年—吉原治郎展—』図録・芦屋市立美術館 1992再録)(三木)

亀井英一(かめい・えいいち)→亀井藤兵衛(かめい・とうべい)

亀井藤兵衛(かめい・とうべい) 1901～1977

1901(明治34)年3月25日和歌山県有田郡湯浅に生まれる。本名は英一。画号に祖父名「藤兵衛」を名乗るが、1953年の春の青龍社展より「玄兵衛」と改称。1919年京都に出て、山田耕雲のもとに寄寓し、日本画を学ぶ。

1925年国画創作協会第1回春季展に日本画《青年像習作》《門の風景》が入選。翌年の第1回聖徳太子奉讃美術展にも日本画《春景》が入選し、確実に日本画家としての道を歩んでいる。一方、この前後に木版画も熱心に研究したようで、「私が版画を作る動機をなしたものは関東震災〔1923.9.1〕焼け出された高見沢達治氏が、大阪の南郊岸の里といふ所に住んでいたので、彫師辻本草明を通じて知り、たびたび彼の為事を見て、創作に生かして見たに始まる」（『版画』『亀井玄兵衛遺稿』所収）といい、また亀井が1926年3月の第5回国画創作協会に木版画を出品して落選したという記事（『新人紹介（4）亀井藤兵衛氏』『版画 CLUB』2-2）もある。落選したとはいえ、1926年初頭までには木版画の習得がある程度進んでいたと考えてよいだろう。1927年京都市立絵画専門学校の選科生として入学するが、創作版画の受理を認めた同年の第8回帝展に木版画《鯛》が入選。日本画を学びながらも、以後10年間ほどは版画家としての活動が続く。帝展は第9回展（1928）に《風景〔電車のある風景〕》、第11回展（1930）に《理髪店》、帝展に続く1936年の文展鑑査展に《甲冑》をそれぞれ出品。また、1928年の第7回国画創作協会展に《黒い家の風景》が入選している。1929年には麻田弁次、徳力富吉郎らと「京都創作版画会」を結成。1933年の第3回展まで展覧会を開催した。また、同年麻田・徳力、浅野竹二、中川伊作と「丹墨社」を結成し、こちらの方も展覧会を開催している。1930年京都市立絵画専門学校選科を卒業。同期に琴塚英一がいる。続いて研究科に進み、5年間在籍。その間、1931年に徳力らと版画誌『大衆版画』（1931.8・11 2冊）を創刊。1933年からは春陽会展にも出品し、第11回展に《花》、第12回展（1934）に《車中》、第13回展（1935）に《椿花二種》をそれぞれ出品。また、1934年の大礼記念京都美術館美術展覧会に《三等急行》を出品。続いて京都市展の第1回展（1935）に《椿花小品》、第2回展（1937）に《観音立像》を出品。京都を代表する版画家としての地歩を固めたが、1937年からは日本画に専念するようになり、同郷の川端龍子が主宰する青龍社を発表の場に定め、同年の第9回展から1965年の37回展まで出品。その間、1940年社子、1942年社友、1950年社人となっている。1966年の龍子逝去による解散後は、東方美術協会の創立に参画し、中心的作家として1977年の第11回展まで毎回出品した。一方版画は、余技的になったとはいえ、戦後も中断することなく続け、1951年の京都版画協会第1回展、1957年泉茂らとの現代版画展（3.8～12 京都・山田画廊）、日米版画名作展（6.29～7.11 京都・丸物）などに出品。また、1956年には創作版画研究会を主宰している。1977（昭和52）年3月11日京都市で逝去。【文献】『亀井玄兵衛遺稿』（亀井玄兵衛遺稿刊行会 1983）／岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12（1984）／『百年史 京都市立芸術大学』（1981）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（三木）

亀田治男（かめだ・はるお）

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）3・4年生在学中、生徒が発行した版画集『刀 再版』（1940～1941）の創刊から参加。その第1号〔1940〕に《校門》、第2号（1940.10）に《鶴田駅》、第3号（1941）に《將軍》、第4号（1941）に《竹》、

最終の第5号（1941）に《夏》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

蒲生秋笛（がもう・しゅうてき）

1933（昭和8）年の第3回京都創作版画会展に木版画《夜》《鉄の灰皿》《ふぐ》《無題》の4点を出品。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12（1984）（三木）

鴨下晃湖（かもした・ちようこ） 1890～1967

日本画家・挿絵画家。1890（明治23）年2月25日東京に生まれる、本名中雄。東京美術学校中退。松本楓湖に師事し大和絵、歴史画を目指す。巽画会に出品。1907年第1回文展に《山法師》を出品し三等賞受賞。文展10回《紅燈》（六曲半双）。帝展でも度々入選を果たし活躍。挿絵では時代物（まげもの）が得意で代表作は、1932年の子母沢寛「国定忠治」、1934年の長谷川伸「杵掛時次郎」、戦後の1956年柴田錬三郎「眠狂四郎無頼控」などが知られ、現代出版美術家連盟に所属。伝統木版に関心を寄せて、1920年刊行の『義士大観』2冊中「地の巻」の《大石主税の大勇》（木版多色摺）担当。1923年から1924年にかけて刊行の（17人の現代画家による）極彩色手摺木版『新浮世絵美人合』（同刊行会 人情本刊行会会員頒布）の《ほろ酔ひ》（大判錦絵）の版下絵を描き版画を制作。他に1933年頃と推定の《舞妓》（大判錦絵）等がある。1967（昭和42）年10月20日逝去。【文献】『日本美術年鑑』（1968年版）（岩切）

茅田五風（かやだ・ごふう）

長野県須坂の信濃創作版画研究会が発行した版画誌『櫟』第2輯（1934）に《賀状》、第3輯（1934.7）に《葺》、第4輯（1934.11）に《川柳讀》、第5輯（1935.4）に《賀状》を発表。【文献】『須坂版画美術館 収藏品目録 2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集』（須坂版画美術館 1999）／『創作版画誌の系譜』（加治）

香山小鳥（かやま・ことり（とうろく）） 1892～1913

1892（明治25）年2月28日〔一説に18日〕長野県下伊那郡松尾村に生まれる。本名は藤祿。1911年3月長野県飯田中学校を卒業し、上京。翌1912年1月竹久夢二との交友が始まり、恩地孝四郎を知る。4月東京美術学校予備科彫刻科塑造部志望に入学。まもなく田中恭吉・藤森静雄との交友も始まるが、特に田中とは深く付き合い、互いの下宿に泊まり、校友会の短歌会「鴨跖草（つきくさ）会」の集まりにも一緒に参加している。また詩歌に関しては、神戸で刊行された文芸雑誌『歓楽』の7月号と10月号に詩歌と絵を発表している。同年7月東京美術学校除籍となり、10月頃に木版彫師の伊上凡骨に弟子入り。自画・自刻の木版画も始めるも、10月下旬に結核を発病。1913（大正2）年6月20日東京で逝去。田中により同年12月の回覧雑誌『密室』第6号に木版画《〔風景〕》《〔木立〕》、1915年5月の公刊『月映』第VI号に木版画《習作》（『密室』第6号に掲載の《〔風景〕》と同作品）が掲載された。田中は小鳥を紹介する『月映』の文の中で、「彼と私の交遊は、彼の死の前一年余の間であつたが、彼が私の生活の上に投げかけた陰翳はかかなり濃いものだった。／木版画に於ては殊に深い縁があつた。ここに収めた版画の「習作」は「深川の冬」といふ二色刷りのいい版画のための習作であつたらしい。「深川の冬」の原版が見付からないために、代りに掲げて彼を偲ぶすがとし

た。これは彼の初期の作品であり同時に末の作品であった。(彼の生涯は全く短かつたから。)この画を見る私の瞳には、あの白昼でもうすぐらい深川の空気と、その鉄工場の槌の響きとのあひだに、だまつて寝てみた彼の姿がまざまざと映る」と記す。【文献】和田浩一「香山小鳥の生涯と作品について」『宮城県美術館紀要』4(1989)／井上芳子「香山小鳥:ゆめの日のかけ」『没後100年「香山小鳥:ゆめの日のかけ」展解説リーフレット』(和歌山県立近代美術館 2013) (三木)

加山三郎(かやま・さぶろう) 1898～1956

1898(明治31)年神奈川県に生まれる。洋画家加山四郎(1900～1972)は実弟。工業学校卒業後、造船所に勤務。1929年の日本創作版画協会第9回展に木版画《椿》《猫》が初入選。1931年か、仲間達と創作版画誌『艸と風』を創刊。第1輯(発行日不明)に《裸婦》、第2輯(1931.3.10)に《土俗玩具》、第3輯(1931.7.20)に《エキス・リブリス》を発表。中島重太郎の創作版画倶楽部が主催した1931年6月の新興版画会第1回展にも《裸婦習作》が入選。「きつつき会一会員」に「昔、創作版画の事を刀画と称した頃を思出す、それはこの絵が幼稚である事ではなく、紺紙に金泥で摺つてあるため刀のあとが黒く出てみるのを見て、ほんとうの刀画をこの方法で、もつと生かしてやれば面白いものが出来やうと想はれる、この絵もその点で面白い」(『版画 CLUB』3-2)と評されている。また、同年9月の第1回日本版画協会展に《EXLIBRIS 試作》、翌1932年6月の第2回展に《自画像》《裸婦》がそれぞれ入選。同年12月の『白と黒』第30号(1932.12.1発行)に《自画像》、『版芸術』第9号(1932.12.1発行)に《年賀状》を発表している。その後は版画制作から離れたようで、晩年は建築会社を経営していたという。【文献】『原色浮世絵大百科事典 第10巻』(大修館書店 1981)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『版画 CLUB』3-2／『創作版画誌の系譜』(三木)

辛島一誓(からしま・いっせい)

九州大分で武藤完一が発行した版画誌『九州版画』(1933～1941)にエッチング作品を発表。第21号(1940.6)に《靴屋のおやじ》、第22号(1940.11)に《楽器をもつ男》、第23号(1941.6)に《友人像》である。《靴屋のおやじ》の作者言には「エッチングとしては未だ数枚目の駄作です」と書いていることから、この頃エッチングを始めたと思われる。大分では教職に従事していたが、1939年10月に上京。武藤完一の紹介により、西田武雄が経営する廣山インキに勤務し、夜間にはデッサンを習得するため、今純三の指導をうける(『エッチング』84 1939.10)。翌年退職。東京市堀切尋常小学校の教師となる(『エッチング』89 1940.4)。【文献】『福岡市美術館所蔵目録』1992／池田隆代「大分県における創作版画誌」(『大分県立芸術会館研究紀要』1号 2002.9)／『創作版画誌の系譜』(加治)

河合卯之助(かわい・うのすけ) 1889～1969

1889(明治22)年3月3日京都東山区五条坂に生まれる。父瑞豊は清水焼の陶工。本人もしばしば「赤絵の卯之助」と呼ばれ、独特の創作模様を得意とした陶芸家と知られる。また、随筆や俳句にもたけ、本業の陶芸

以外にも絵画、版画、染色、図案と幅広い仕事を残す。1902年京都府立第一中学校に入り、医者を目指すも、病気のため断念。1905年京都市立美術工芸学校絵画科、1910年京都市立絵画専門学校本科と進んで、日本画を学ぶ。画号は「方橋」、「方喬」を使う。卒業制作の《三条街道》で師・竹内栖鳳の不興を買ったと伝えられ、1912年の卒業後は、次第に制作の主体を陶芸に移し、1923年頃からはほぼ毎年陶器の個展、頒布会などを開催。1928年には住居・工房を京都府乙訓郡向日町に移し、同年の第9回帝展、翌年の第10回帝展に出品したこともあるが、その後は京都市展などを除き、公募展と距離を置きながら、旺盛な創作活動を展開した。

版画は1913年頃に始めたようである。1914年には京都の佐々木文具店で絵専同窓の松宮芳年(実)、森谷梢月(南人子、利喜雄)らと版画展を開催。同店の機関雑誌『鳳梨(アルナス)』(1914.11・1915.3 2冊)の第1号に木版の表紙絵、翌年の第2号にエッチング作品《比良村より見たる比良山》を発表している。また、同じころ松宮・森谷らと同人誌『黙鐘』(8号から『光芒(コロナ)』と改題 1914.12?～1915.11 9冊か)を創刊。編集に関わり、表紙・裏表紙などを木版画で飾った。1916年には自刻木版による図案私集『伊羅保』(表紙・裏表紙・本図30 佐々木文具店)を出版し、同書を松宮実と捧げている。その後、すこし中断があり、1922年の神戸弦月画会主催の創作版画展に木版画《夕焼》《あやめ》《岳の別荘》の出品。1923年旭正秀らの創作版画誌『詩と版画』(1922.9～1925.8 13冊)の第2輯(1923.3)に木版《壺》の複製と「版画陶器について」を寄稿。1924年には神戸の創作版画誌『HANGA』第2輯(版画の家 1924.5)に《草大王》を発表。『詩と版画』第5輯(1924.6)から「詩と版画社」の同人となり、挿絵・表紙絵を発表するとともに、同年10月に京都で開かれた「詩と版画社第1回展」の開催に尽力。自身も石版《野葡萄の葉》、木版《宝船》、エッチング《パイプを啜る自画像》《ぼたるぶくろ》《小鳥》を出品。11月に開かれた日本創作版画協会第6回展にも銅版画《パイプを啜へた自画像》《びんぼうづる》を出品している。1926年には石版と木版の陶器図案を集めて『河合卯之助陶画集』(自刻木版5図・自作石版33図 200部限定)を出版。1931年日本版画協会の設立に参加したが、出品はせず、翌年退会。その後、個展の案内状や目録の表紙などを版画で飾ることもあったが、版画家としての活動はなく、文人陶工として自由な創作活動を展開したのち、1969(昭和44)年1月14日京都府乙訓郡向日町の自宅で逝去。【文献】『近代陶芸の文人 河合卯之助展』図録(宮城県美術館 1997)／『創作版画誌の系譜』(三木)

川合喜二郎(かわい・きじろう) 1915?～1990

1915(大正4)年の生まれか。1931(昭和6)年の第6回国画会展に油彩画《秋の風景》が初入選。翌1932年には第2回独立美術協会展と第7回国画会展に出品。1936年からは二科会に出品するようになり、第23回展に油彩画《畠》が入選。以後、26回展を除き、1943年の第30回展まで毎回出品。1942年には二科会会友に推挙されている。版画は、1937年の第12回国画展に木版画《花》が初入選。以後、第13回展(1938)に《花》、第14回展(1939)に《朝の道》《少女》、第15回展(1940)に《繫牛》と連続して入選している。また、1938年に織田一磨らとまとめた版画集『むさしの風景』其の一(朴

の会 11.15 発行)の表紙絵・裏表紙絵《善福寺》《善福寺の池》を発表。翌1939年の「其の二」にも参加。著書に『合羽ABC』(未見 1938 限定100 『京都古書籍・古書画資料目録 第六号』による)などがある。戦後は、自由美術家協会の会員となり、1964年には「主体美術協会」の創立にも参加した。1990(平成2)年3月東京都で逝去。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『国展目録』／『むさしの風景』(三木)

川合玉堂 (かわい・ぎょくどう) 1873～1957

1873(明治6)年11月24日愛知県葉栗郡外割田村(現在の一宮市木曾川町)に生まれる。本名芳三郎。偶庵とも号す。8歳で岐阜に移り住む。14歳で京都の望月玉泉門下となり「玉舟」と号す。1890年「玉堂」と改め、幸野楳嶺の画塾大成義会に入門。1895年京都で開催の第4回内国勧業博覧会で橋本雅邦の作品に感銘し、翌年上京して橋本雅邦に師事する。1898年雅邦に従い岡倉天心、横山大観らが創設の日本美術院に参加。岡倉天心が主導の日本絵画協会・日本美術院合同共進会に出品を続け、受賞を重ね注目される(1903年第15回展まで出品)。1907年第1回文展より審査員に任命され、以降文展に出品、第12回展(1918)まで審査員を務める。1915年東京美術学校日本画科教授となる。1916年第10回文展に《行く春》(重要文化財)を出品。1917年帝室技芸員。1940年文化勲章受章。1944年東京の奥多摩御岳(現在の青梅市)に疎開、戦後も住み続け、1957(昭和32)年6月30日同地で逝去した。宮武外骨主宰の江戸風俗浮世絵雑誌『此花』第十二枝(1910.12)には現今浮世絵師の一人として紹介されているが、明治後期の『文藝倶楽部』(博文館)に美人画の木版口絵や竹内栖鳳、山元春峯らと合作の『日本名所画譜』(芸艸堂 1913 全12枚)に木版画の制作などがある。【文献】『山田書店新収目録』56(2003秋)／山田奈々子『木版口絵総覧』(文生書院 2005)／『没後50年 川合玉堂展』図録(日本橋高島屋・なんば高島屋 2007)(樋口)

河合新蔵 (かわい・しんぞう) 1867～1936

1867(慶応3)年5月27日大坂に生まれる。号は無涯。実家は呉服商で、鈴木蕾齋、前田吉彦に洋画の手ほどきを受け、1891年上京し、五姓田芳柳、その後小山正太郎の不同舎に学ぶ。1900年満谷国四郎、鹿子木孟郎、丸山晩霞らと渡米。ボストンなどでの吉田博らとの水彩画展の売上を資金に渡仏。アカデミー・ジュリアンに通う。1904年に帰国、太平洋画会に出品し会員となる。一時期東京に住んで、1906年頃より大下藤次郎を助けて日本水彩画講習所の講師となる。文展には第1回展から出品し、水彩画家として活躍。1910年京都に移り、関西美術院の教授に就任、後進の指導にあたる。1913年日本水彩画会の創設に参加。同年第7回文展で三等賞を受賞。1936(昭和11)年2月15日京都で逝去。版画は、1922年渡辺版画店主催「第二回 新作版画展覧会」(東京日本橋・白木屋呉服店で開催)に木版画《辨天橋》を出品。『美術月報』第3巻第9号の「展覧会月評」に、「古代錦絵の簡單明快なる美しき線に代はるに、吉田博、河合新蔵氏等の洋画の試み、複雑にして全體を色のトーンで現はさんとしたるは現代式である」と記されている。ただし、作品は未見。【文献】『第二回 新作版画展覧目録』(渡辺版画店主催・白木屋呉服店 1922.6.1～6.7)／『美術月報』3-9(美

術月報社 1922.7)／『浅井忠と関西美術院展』図録(府中市美術館 2006)(樋口)

河合 光 (かわい・ひかる)

小野忠重発行の版画誌『新版画』第11号(1933.12)に《競馬場》を発表。都会的風俗を得意としたといわれるが、作品未見。【文献】『モボ・モガ 1910～1935』展図録(神奈川県立近代美術館 1998)／『創作版画誌の系譜』(樋口)

河合英忠 (かわい・えいちゅう (ひでただ)) 1875～1921

日本画、挿絵。1875(明治8)年10月17日東京麹町区内幸町に生まれる。本名六之助。朝日新聞の専属挿絵画家であった右田年英に師事し、1899年には朝日新聞社に入社。1901年結成の青年日本画家集団で、浮世絵の伝統を活かしつつ洋風表現にも挑戦した新たな人物・風俗画を求める「烏合会」に結成時から参加。歴史画を小堀鞆音にも学ぶ。1913年文展出品の《火車》が初入選。1921(大正10)年9月17日逝去。1921年刊行『義士大観』の2冊中「天の巻」の《兇変の急報》(木版多色摺版画)を描く。【文献】『此花』第5枝(雅俗文庫 1910.5)「現今浮世絵師(五)」の「河合英忠」項目等(岩切)

川上兼吉 (かわかみ・けんきち)

1931(昭和6)年の第3回プロレタリア美術京都地方大展覽会(6.19～21 京都・第二勸業館 主催:日本プロレタリア美術家同盟京都支部)に版画《工場(A)》《工場(B)》《山宣追悼講演会》とポスター《支那××を守れ》を出品。当時、日本プロレタリア美術家同盟京都支部に所属していた。【文献】『第3回プロレタリア美術京都地方大展覽会目録』(1931)(三木)

川上澄生 (かわかみ・すみお) 1895～1972

1895(明治28)年4月10日横浜市紅葉坂(現・横浜市西区葉ヶ丘)に生まれる。本名は澄雄。1907年青山学院中等科に入学。図画教師小代為重から、図画教育を受ける。1913年『秀才文壇』に平峯劉吉(名を友人平峯憲の平峯を取り、当時私淑していた岸田劉生の「劉」の一字を借用する)の名で、口絵を応募し二等となる。以後、『文章世界』『秀才文壇』『中学世界』等々に度々投稿し受賞を重ねる。投稿活動は1921年頃まで続く。更に青山学院在学中には、下級生であった東郷青児、和田香苗らによって結成されたクローバー画会の展覧会、回覧雑誌に版画や詩を発表する。澄生の版画制作の初期活動である。1917年父の勧めでカナダに渡航する。カナダ、アメリカを放浪し、翌1918年に帰国する。1919年には第1回日本創作版画協会展に《仮面舞踏会の帰途》を初めて応募するが落選する。1921年栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)に英語教師として赴任し、河内郡姿村姿川村大字西川田に住む。1922年の第4回日本創作版画協会展に《黒き猫》が初入選する。この入選を切っ掛けに恩地孝四郎、平塚運一を始めとした、版画家らとの交流を深めることとなり、澄生が中央での活躍の切っ掛けとなる。この時期の澄生の作品は、カナダ、アメリカの放浪期のスケッチをもとにした異国風物や、横浜の風景を描く一方、青年期の切ない思いを詩情豊かに描いた優品がある。1924年には詩と版画社第1回展に出品(1925年に同人となる)する。同年の国画創作協会第4回展に《春の伏兵》が入選。以後、日本創作版画協会(日本版画協会)とともに、国画創作協会が澄生の活動の骨

格をなす。1925年には姿村の教師らによる版画同人誌『村の版画』に平塚運一、深沢索一と参加する。1926年には棟方志功を版画家へと向かわせる転機となった作品《初夏の風》が、国画創作協会第5回展に入選する。1927年最初の自画自刻自摺の詩画集『青髭』が制作され、澄生の創作活動の柱となる絵本作りの先駆けとなる。1927年恩地孝四郎とともに『港』の同人となる。同年日本創作版画協会会員となる。1928年に国画展第7回展に無鑑査出品する。同年、恩地孝四郎、深沢索一、平塚運一、逸見享、前川千帆、藤森静雄、諏訪兼紀らと卓上社を結成。さらに国画創作協会日本画部会員、会友らの新樹社に参加。さらに宇都宮中学校の版画好きの生徒らの版画同人誌『刀』に顧問格で参加し、1932年まで毎回作品を発表する。1930年に恩地孝四郎、平塚運一、逸見享、前川千帆らと、版画誌『きつつき』を創作版画倶楽部より創刊。1931年に日本版画協会が設立され会員として参加し、毎年作品を発表する。同年『版画 CULB』の編集同人になり活躍する。1932年頃よりガラス絵の制作を開始する。1935年武井武雄主宰の版交の会（後に榛の会と改名）の会員となり、解散まで作品を発表する。1942年に宇都宮中学校を退職する。1943年国画会版画部同人となる。日本藝協会栃木支部設立に際し発起人に列す。1944年に発刊した『時計』は戦時下において、趣味的贅沢本として、栃木県特別高等警察から咎められたが出版する。1945年には妻の実家のある北海道白老郡白老村に疎開。アイヌ風俗、苫小牧の風景などを描く一方、更科源蔵と交流をもち多数の装幀挿画を制作する。1948年国画会工芸部会員に棟方志功ともども推挙される。1949年宇都宮に戻り、栃木県立宇都宮女子高等学校の講師となり校内に居住する。1951年には、版画愛好の教職員や生徒によって版画同人誌『鈍刀』が創刊され、没年まで関わり続ける。この頃より創作者としての意識が高められて行く。版画制作の他に焼絵、ガラス絵、油絵、工芸品などを手掛ける。版画については、生涯の主要画題となる南蛮、文明開化風俗、洋燈、時計が描かれるようになる。1958年に宇都宮女子高等学校の退職を機に、版画家としての活動をより鮮明にする。また、銀紙、黄、黒染紙、光沢紙や、紙以外には革に摺るなど、版の効果を高めるための工夫を怠らない。さらに個展を始めとして、各種の展覧会に積極的に作品を発表しつづけ、その活動は滞ることなく晩年まで続けられた。1972（昭和47）年9月1日逝去。【文献】小林利延『評伝 川上澄生』（下野新聞社 2004）／『川上澄生展』展図録（横浜そごう美術館 2009）（河野）

川上成多（かわかみ・せいた） 1912～没年不詳

1912（明治45）年、川上澄生の弟として横浜市に生まれる。1923年の関東大震災で実家が罹災したため、10月に兄を頼って父と共に宇都宮に転居。1925年、兄が英語教師をしている宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）に入学し、洋画クラブ「パレット会」に所属する。同校生徒による版画誌『刀』（1928～1932）の創刊に参加し、1930年の卒業まで発表を続ける。第1輯（1928）には《花》、第2輯（1928）に《おにあざみ》、第3輯（1928）に《風景》、第4輯（1929）に《手風琴》、第5輯（1929）に《風景》、第6輯（1929）に《春駒》、第7輯（1930）に《橋》を発表。それ以前、尋常小学6年生の時に制作した《風景》が神戸・版画の家発行『HANGA 児童作品集』第1号（1925.6）に掲載される。【文献】『版画をつづる夢』展図録（宇都宮美術館 2000）／『創作版画誌の系譜』

（加治）

川喜多半泥子（かわきた・はんいでいし） 1878～1963

1878（明治11）年11月6日三重県津市の素封家で、日本橋大伝馬町に寛永年間から続く木綿問屋、川喜多家の一人息子として生まれる。幼名善太郎。一歳で家督を相続し、十六代久太夫政令（きゅうだゆう・まさのり）を襲名。1894年三重県尋常中学（現在の県立津高校）在学中、同校に赴任してきた藤島武二に洋画を学ぶ。1901年東京専門学校（早稲田大学の前身）を中退し、家業を継いで百五銀行頭取や企業の要職を歴任して財界で活躍。1930年私財を投じて、津市に社会事業と地域文化振興の拠点として「財団法人石水会館」を設立した。傍ら青年期は写真に魅せられ、50歳を過ぎて作陶に没頭。美濃の荒川豊蔵、備前の金重陶陽、萩の十三代三輪休雪など優れた陶工と交流し、素人ながらユニークな作陶は「破格」と評された。1963（昭和38）年10月26日津市の千歳山で逝去。版画制作は、1934年川喜多商店創業300年祭記念に、木版画《大伝馬町一丁目 お竹大日》（ペンネーム「紺野浦二」名で「昭和8年」摺込み年記入、裏面には「大伝馬町木綿問屋開店三百年記念錦絵三百枚之内」と摺られている）の制作がある。紺野浦二『大伝馬町附録 仕入帳』（芸芸書院 1936 300部）の口絵にも使用。【文献】『川喜多半泥子のすべて』展図録（三重県立美術館ほか 2009）／『版画堂目録』92（2011.7）（樋口）

川口剛夫（かわぐち・たけお）

横浜の日曜版画家集団である「きくづ同人社」が発行した版画誌『きくづ』第6号（〔1930〕.4）に《古都》《裸体と壺》、第8号〔1930.6〕に《花》《静物》、第10号〔1930.8〕に《裸婦》《静物》、第2巻1号〔1931.1〕に《風景》《静物》、第2巻3号〔1931〕に《鯉のぼり》を発表。当時、川口は北野商会（東京市芝区愛宕山2ノ74）に勤務しており、第2巻1号の「同人近事片々」では「電気界のオーソリチー」と紹介されていることから、北野商会は電気製品を扱っていたと考えられる。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

川口範雄（かわぐち・のりお）

兵庫県で発行された西日本新版画創作普及協会の機関誌『西日本新版画』第1年2輯（1936.10）に《お浜》、第2年1輯（1937.3）に《寂》を発表。第2年2輯（1937.7）には小文「旅行先より」を寄稿。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

川口操子（かわぐち・みさこ）

兵庫県で発行された西日本新版画創作普及協会の機関誌『西日本新版画』第2年1輯（1937.3）に《かきつばた》、第3年2輯（1938.7）に《大根》を発表。「みさこ」とサインあり。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

川口 稔（かわぐち・みのる）

1934～35年頃、青森市栄町で彫刻刀など木工関係の道具を扱う店「手工社」を営んでいた川口は、郷土の手工芸教育に熱心であった。小学校での手工教育における版画の有効性をあげ、版画制作を生活手段の一助ともするために、創作版画を広めたいとの意向をもっていた。当時、青森創作版画研究会夢人社は県内小学校の指導用として小品版画集『あをもり』を創刊するが、第4集（1934

頃)は川口の協力を得て手工社から発行する。また、手工社は創作版画の普及のためとして版画誌『不那之木』(1935頃)を出版。その『不那之木』第6集〔1935〕に《蔵書票》を、夢人社発行の『陸奥駒』第16集(1934.12)に《年賀状》を発表。その後、手工社を廃業し、1939年には八戸尋常高等小学校の教員となる。なお、『あをもり』は第1・2・4集を、『不那之木』は第3～8集を確認している。【文献】佐藤米次郎「銅版雑記」(『エッチング』76 1939.2)／「緑の樹の下の夢―青森県創作版画家たちの青春展」図録(青森県立郷土館 2001)／『創作版画誌の系譜』(加治)

川久保守安(かわくぼ・もりやす)

長野県の教師の集りであった下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第1号(1934.9)に《スピーカ》、第4号(1937.7)に《習作》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)